

## 解題

黒木勲藏

江戸文藝壇に於て一大分野を劃する淨瑠璃諸流派中、最も國民的であつて、今尙劇界樂壇に大なる勢力を有し、且その内容の豊富にして文藝的價値に富むものは義太夫淨瑠璃であると思ふ。よつて今その正本中より代表的名作を選擇して、これを淨瑠璃名作集上下二巻として、作品の年代順に收める事とした。

尤も淨瑠璃作者の氏神と稱へられた近松門左衛門の優秀なる作品は、既に近松名作集上下二巻としてこれを刊行したので、自ら省かれた事は言ふ迄もない。又井原西鶴の作といはれる「曆」は宇治加賀掾の正本であるが、極めて珍とすべきのみならず、義太夫劇史上にも關係を有するを以て特にこれを加へる事とした。

さて本巻に收めた二十二篇はこれを年代的に見れば、元祖竹本義太夫が初めて一流を樹てて道頓堀に竹本座の櫓を擧げた時代である貞享初年から元祿の盛時を経て竹本・豊竹兩座の對立となつて、いよゝゝ義太夫劇の全盛期に達した元文年間に迄互り、義太夫劇發展史上最も大切なる期間の代表作を含む事となつてゐる。而して又これを作者の方面から見れば、竹本座に於ては近松と同時代の錦文流の作「本海道虎石」を始めては近松に對峙した紀海音及び並木宗輔（千柳）の作の一部を收めた。これによつて元祿享保期の主要なる淨瑠璃作者はほゞこれを網羅した事となるが、殊に紀海音に關しては、從來世に流布して居る作品以外に、

特に未だ覆刻されなかつた稀観書中の名作に屬するものと思ふ。「富仁親王嵯峨錦」「愛護若母箱」「傾城思升屋」等を加へて、彼の隠れたる半面を顯揚すると共に、聊か新研究資料の提供にもと努力した次第である。その他出雲以下の諸作が淨瑠璃戯曲の名篇傑作として今尙人形劇に歌舞伎劇に繰返して演ぜられて居る眞の代表作である事は更めて言ふ迄もないであらう。以下簡単に各篇について解題を加へる。

### 暦こよみ

貞享二年正月刊行。宇治加賀掾正本。

作者については、西澤一風の「操年代記」には西鶴であると記され、又藤井紫影博士もこれに基いて西鶴であると言つて居られる。(江戸文學研究。女性第七卷第三號)この他に西鶴の淨瑠璃が絶無である今日、その可否は比較研究のしやうもない事で、結局これに従つて置くより外は無いと思ふ。

竹本義太夫がその旗擧げに「世繼曾我」を語つて好評を博した翌年、京都の宇治加賀掾が下阪して興行したのが本曲であつて、これに就いて「操年代記」は次のやうに言つて居る。

其明寅あけの年、京宇治加賀掾難波にくだり、今の京四郎芝居にて西鶴作の淨瑠璃暦といふをかたられければ、義太夫方には賢女手習井新曆として兩家はりあひ、つひに義太夫淨瑠璃よく、嘉太夫(加賀掾)がた止みぬ。

併しこゝに寅の年、即ち貞享三年とあるのは誤りであらう。何となればこの頃は正本の出板はその作の上演と殆んど時を同じうしたものであるに、「暦」も「賢女手習井新曆」(近松名作集上巻所収)も共に貞享二年正

月の刊行であるから、興行も亦この時と見る方が至當であるやうに思はれる。

抑も加賀掾が何故態々下阪したかといふに、その理由は明かには傳へられて居ないが、以前自分の芝居でワキを語つた事もあつた天王寺村の百姓の子五郎兵衛が、人もあらうに自分と水魚の間柄であつた興行界の策士竹屋庄兵衛と結託して、遂に大阪で櫓をあげ、しかも當時賣出しの作者近松が自分のために執筆した「世繼曾我」「藍染川」「以呂波物語」等を勝手に次々と語つて好評を博したのを憤つて一泡吹かせてやらうと思つて、特に近松よりは文壇に於て先輩であつた西鶴の筆に成る作を携へて乗込んだものではなからうかと推測する。然るに作者も太夫も共に後輩であるとされてゐた義太夫の方が勝つたのは、地の利を占めて居た點もあつたかも知れぬが、「曆」の代りに加賀掾が近松の作「凱陣八島」を出して形勢を挽回した事實によつて考へれば、淨瑠璃作者としては、西鶴は近松の敵でなかつた事を暴露した皮肉な現象であつたとも言へる。



井原西鶴肖像

尤も今こゝで兩作の優劣について細説する遠はない。詳しくは兩原作について、實際に御比較あらん事を望むが、要するに當代の操芝居として實演される戯曲といふ點から見れば、場面の變化と人物の働きのある點に於て、又その文章の朗誦に適する上に、潤ひと温か味とに富む點に於て「賢女手習并新曆」の方が勝つて居るやうに思はれる。とはいへ「曆」も亦淨瑠璃史上頗る注目すべき作である事は言ふ迄もない。

本曲については藤井紫影博士が大正十四年三月の女性誌上に詳しい紹介をされて居るので、廣く世に知られて居る事と思ふが、その全文が忠實に翻刻されたのはこれが初めてであるかと思ふ。校訂用原本は八行四十二丁本である。

作者西鶴の傳記はこれを西鶴名作集に載る事とする。

此の書は西鶴の「賢女手習并新曆」の全文を忠實に翻刻したものである。校訂用原本は八行四十二丁本である。作者西鶴の傳記はこれを西鶴名作集に載る事とする。

万 米 昔 一

ほんかいだうごらがいし  
本海道虎石

元禄十二年五月六日初日竹  
本座興行。

正本本文の巻頭にはたゞ「虎石」とのみあるが、表紙の題簽には「本海道虎石」と題してある。正本には作者名はないが、齋藤月岑の「聲曲類纂」には錦文流作とある。のみならず本曲の「大磯の虎道行」をもちつて「居ながらの關係を有する享保十年正月豊竹座興行の「昔米万石通」(西澤一風・田中千柳作)の中にも「本海道虎石錦文流が作ちやげな」とあるのによつて見ても、作者錦文流と斷定して差支なからうと思ふ。

曾我物の傍系に屬する技巧澤山の作であつて、曾我兄弟と虎・少將との情事に平家の侍伊賀平内左衛門の

居ながら  
の關係を有する  
享保十年正月  
豊竹座興行の  
昔米万石通  
西澤一風・田中千柳作  
の中にも  
本海道虎石錦文流  
が作ちやげな  
とあるのによつて  
見ても  
作者錦文流と  
斷定して  
差支なからう  
と思ふ。

り よ 「通 石

遣女豊姫の敵討を縋ひ交ぜた作である。豊姫は父の仇三浦與一を討たうとして相傳の巨栗矢三太と共に東下して自らは化粧坂に身を賣つて少將と稱へ曾我五郎と馴染の仲となり、三太は曾我十郎の家僕となつて關三郎と名のり、互に氣脈を通じて機を狙つて居たが、十郎の戀敵である三浦與一が虎を身請する事となつたので、一同喋し合せて虎が身請されて行く途上に於て討つ計畫を立てたが、闇夜の爲に打洩らしたのを、のち朝比奈三郎とその母巴との後援の下に少將は首尾よく復讐の素懐をとげるといふのが本筋で、第一段に箱王祐經對面の場を描き、これを動機として第二段に於て五郎の水垢離より荒事の場を設け、更にこゝに伏線を布いて、第五段に於てそのいはれを明かす虎が石の叙述の趣向をこらして、こゝに「北海道虎石」と題したもので、随分荒唐無稽の作である。

猶各段について見るに、第一段の頼朝箱根より歸還の船中に於て船頭が船の起原等を座興に誦ぶ條なる「還御を誘ふ……」より「龍頭鷓舟とこそ誦ひけれ」迄の詞章は、一中節によつて作曲されて「泰平舟盡し」と題して同流の語り物として今日迄傳へら



りよ「弟兄人五我曾」

れて居る。又第一段の切は謡曲「船辨慶」の纏案であり、第二段の切に於て五郎が酒匂川で水垢離行法の結果不動明王から怪力を授かり人馬共に取つて投げる條は、元祿十年五月江戸の中村座興行の「しほものこんげ兵根元曾我」(初代市川團十郎作)の第二番目なる五郎荒事の條に類する趣向である。第三段で十郎が案山子に化けて三浦と虎との出會の様子を窺ふ趣向は近松の「曾我五人兄弟」(元祿十四年十一月)の第四段目で五郎が母の目を忍ぶ爲に案山子となる場面に轉用されて居り、第四段陸上のぼりの禪師庵室の場の叙事は「方丈記」の日野山閑居から脱化したものであらう。

「からまし業大門屋敷」(錦文流作、寶永二年刊)に

虎が石の淨瑠璃にもじてすり振り手摺と

いふ事を仕出し、人形のつか

ひやうを見せ、すがかり素語といふ事

をはじめたり。あやつり芝居に舞臺を付くる事此時をはじめとす。

とあるのによれば、本曲興行の際舞臺の技巧にも新工夫をこらした事がわかる。文流は手づまからくり人形を以て知られた伊藤出羽掾座の作者をも兼ねて居たのによつて考へれば、舞臺技巧に於ても勝れて居つて、この際新工夫をこらしたのかも知れない。

校訂用原本は八行五十八丁本。これも今度初めて覆刻されたものである。

作者錦文流。大阪の人、西鶴の門人で俳名を錦頂子といふ。又浮世草子の作者としても知られ「風流今兼



好」(寶永二)「棠大門屋敷」(同上)「熊谷女編笠」(寶永三)「當世乙女織」(同上)「好色手柄咄」(寶永五)等の著作がある。淨瑠璃作者としては櫻塚西吟・西澤一風と共に淨瑠璃文者三傑と呼ばれた。その作に係るものを左に列挙する。

本海	道虎	石	(元祿十二年五月)	竹本座	興行
國仙野	手柄日記		(元祿十三年末?)	伊藤出羽	座
傾城	八花形		(元祿十五年正月)	竹本	座
高名	大福帳		(寶永元年)	竹本	座
男色	賀茂侍		(寶永三年?)	豐竹	座
仁徳天皇	萬年車		(正徳三年七月)	豐竹	座
西行法師	墨染櫻		(享保二年五月)	豐竹	座
熊野權現	烏午王		(享保四年)	豐竹喜代太夫	座

寶永初年頃の刊行と思はれる「竹本祕傳丸」に「今は出羽の作者」として錦文流を出してあるのによれば、上記の外にもまだ作があつたものであらう。詳しい事の不明なのは残念である。

### 心中涙の玉井

この淨瑠璃は豊竹座の創立者豊竹若太夫(後の豊竹越前少掾)が初めて名乗りをあげて豊竹座を起した時に興行された淨瑠璃である。明和板の「外題年鑑」によれば、元祿十五年五月「末廣十二段」の切として上演



した事になつてゐる。併しこれは誤りである。今その理由を簡単に次に述べよう。

抑も豊竹若太夫は元祖竹本義太夫の門弟で、元祿八年十八歳で竹本采女と名のつて竹本座初舞臺、元祿十五年義太夫一座旅興行の跡芝居で「傾城懐子」といふ淨瑠璃を語り、その後道具屋吉左衛門(道具屋節を開いた人)等と素淨瑠璃の出語をやつたが不成功のため地方巡業を試み、その歸りに堺で興行中、土地の糸屋の娘と手代との情死事件があつたので、これ幸ひと一夜濱の一段淨瑠璃に仕組んで興行して大成功であつた。そこで歸阪して長門九郎兵衛と相座本で道頓堀の女舞の芝居に構をあげ、豊竹若太夫と改名して「さかひみやげ」と外題に角をつけて「心中涙の玉井」を上場して大當りを取つた。この點に

西流法師の流作  
錦太郎作  
... (Handwritten text in cursive style) ...

西 行 法 師 築 橋

ついでに「操年代記」の次の記事が注目すべきである。即ち、大阪に歸り、長門九郎兵衛と語りひ、相座本にて舞の芝居にやぐら幕、豊竹若太夫と改め、はなやかなる看板、さかみやげ心中玉の井と出しける。春頃筑後がたには曾根崎心中、兩家同じやうなる仕組（下略）

とあるが、「外題年鑑」の説に従へば「曾根崎心中」（元祿十六年五月）よりは一年前の興行でなければならぬが、件の「操年代記」の文では「曾根崎心中」よりはいくらか後の興行であると解釋される。のみならず作の内面的考察も亦これを肯定せざるを得ないのである。其要點をいへば、先づ脚色の上に於て、發端の「おはつ住吉参り道行」は「曾根崎心中」の發端のおはつ觀音廻りの雛案である。續いて住吉の鳥居前の水茶屋でおはつが久兵衛に出合ふ場面は、これ亦「曾根崎心中」の生玉社頭の出茶屋の場の模倣であると思ふ。加之、おはつの詞に「そちの内でも表でも曾根崎の心中は、南へ移つて來たさうな事」とあるのなどによつて考へるに、本曲が「曾根崎心中」よりは後である



豊竹題前少縁像

事は明かであると思ふ。堺で興行した時にはどんな筋であつたものか、その正本が傳はらないので解らない、自然本曲との關係も不明であるが、本曲が「曾根崎心中」に做つた事は兩者の比較によつて明言し得ると信ずる。

作者については紀海音であるといふ説もあるが、署名のある正本は見ない。併し文調には後の海音の世話物に似た點もあるので、或はさうかも知れないが、姑く作者未詳として置く。

板元の正本屋九左衛門は「操年代記」の著者で、豊竹座とは淺からぬ關係のあつた西澤一風その人で、豊竹座の正本はすべてこゝから出板されてゐる。

校訂用原本は十行十六丁本。

### 金屋金五郎浮名額

明和板の「外題年鑑」には元祿十五年八月朔日から「源氏烏帽子折」の切として興行したとあるが、これも前の「心中涙の玉井」との相關問題として、操年代記に涙の玉井の次の替りに出したとあるのによつて一年繰下げて、元祿十六年秋の興行と定むべきであらう。

作者は紀海音との説もあるが、正本には署名は無い。

本曲については濱松歌國の南水漫遊を始めとして、水谷不倒氏の世話浮瑠璃大全下巻の解題小三金五郎の條、藤井博士の江戸文學研究等に考證や解説が發表されて居るから、今更同じ事を繰返す必要はないと思ふが、作中の主人公である金屋金五郎の傳記に關してはまだ明かにされて居ない。校訂者もこれに就いては多

上 金屋さんかしののぶたけい

うきやうしはまじしとま  
 うらめひんまのたかめ  
 てきやうせいのけいとうとま  
 れらるるのよきまじり  
 のまじりひらたけとま  
 まんま けいとうのまじり  
 うきやうせいのまじり  
 うきやうせいのまじり  
 うきやうせいのまじり



Handwritten text in a cursive script, possibly representing a list or a set of instructions. The text is written vertically, starting from the top right and moving downwards. The script is highly stylized and difficult to decipher. The text appears to be a list of items, possibly names or titles, arranged in a vertical column. The characters are closely packed and flow together in a continuous line. The overall appearance is that of a handwritten document or a list of entries.



Handwritten text in a cursive script, likely a form of shorthand or a specific dialect. The text is arranged in approximately 15 vertical columns, reading from right to left. The script is dense and highly stylized, with many characters appearing to be variations of a few basic forms. The text is contained within a rectangular border.

少調べて見たが、文獻に乏しいので殆んど得る處はなかつたが、次の事だけは言ひ得ると思ふ。俳優としての金屋金五郎は元祿十年に大阪の荒木與次兵衛座興行の「當麻中將姫まんだらの由來」に横佩家の奥家老立田重助の役を勤め、(狂言本による)又元祿十二年岩井半四郎座興行の「龍女つやおしろい」にも出てゐるそして元祿十四年の額見世から大阪太左衛門座の座本加茂川のしほに抱へられる事となつたが、額見世の舞臺も踏まずに元祿十三年の十一月廿日に三十一歳で世を去つたのである。私が茲に金五郎の歿年を元祿十三年十一月とするのは、加茂川のしほが元祿年間に座本をつとめたのは十四年度である事、作中の俳優の名前は皆當時實在の人物そのまゝであるのに、金五郎の病氣見舞に來た太夫元を始めとして、瀧岡彦右衛門・山下又四郎等はこの年のしほに抱へられて一座をして居たのと、又この作の結末に「霜月廿日の朝嵐消えし、金屋がうき命」とある句とによつて推定し、年齢は歌祭文に基づいたのである。役者としては漸く賣出してこれからといふ惜しい時であつたらしく思はれる。

本曲の荒筋はかうである、大阪籠屋町(今の京町堀北通邊)の額風呂の湯女として名高かつた小さんは俳優金五郎と密かに馴染を重ねてゐたが、小さんが田舎の大盡に身請される段となつて、二人の密通が露顯した爲に大盡は約束を變改したので親方は怒つて小さんを鳥の内笠屋町の娼家綿屋に賣つた。金五郎は寒夜に小さんの許に通つた爲に宿病が重つて死し、小さんは悲歎の極自殺を企てたが、人々に止められて斷髮するといふのである。當時の敵役として名高かつた小野山宇治右衛門が金五郎と小さんを争つたといふのも事實によつて仕組んだものかも知れない。

本曲は歌祭文によつたものと思ふが、加賀掾の正本「難波役者評判」との関係については、同書未見の私



は單に「南水漫遊」所引の短かい詞章のみによつては、いづれが前であるかを斷じ得ない。順序からいへば先づ浮名額が大坂で持離されたので、京都の加賀様も「難波役者評判」と題して出したと見る方が自然のやうに思はれるだけである。

宮古路豊後の正本に「金屋金五郎額の小さな江戸土産」と題するものがある。書出しは浮名額の金五郎が綿屋の格子際に忍ぶ趣向を轉用して小さんと呼出す事になつて居り、そして風呂場の小陰で密會する處へ、小さんを身請するといふ客甚六が來て、金五郎が風呂の内へ隠れたのを幸ひ、風呂たき男に金を與へて蒸し殺させるといふ筋で、原作とは全く變つた作意である。

又小三金五郎が江戸に移されて、淨瑠璃に作られたものでは、文政二年六月河原崎座興行の清元の淨瑠璃「浮名の立額」、嘉永三年九月中村座興行の常磐津の「對色はなぬかたしのなご 縁のなご 長夜」などは名高いが、名は小さん金五郎

金屋金五郎の江戸土産  
 彼のよき江戸土産  
 ひまの縁おたけびり  
 秋風も黄もどく  
 アわらうもどく  
 男びり  
 春のたけ  
 ちよびり

〔産 土 戸 江〕 本 正 縁 後 豊

でも、筋も人物も全く別なものである。況して黙阿彌の作である「梅雨滿仲町」(巳の吉殺し)に出る小さん金五郎などに至つては尙更で、全く江戸前の人物になつてゐる。

校訂用原本は十行十八丁本。これも覆刻されたのは此度が初めてである。

### 金屋金五郎後日雜形

正本巻頭に太夫直之正本とあるのみで、外題年鑑などにも載つてゐないが、正本の挿畫に若太夫出語の場があるのによつて、前の浮名額との關係上豊竹若太夫の正本であるとしてよいと思ふ。作者は紀海音かとの説もあるが、明かでない。又その著作年月も從來不明とされてゐたが、この作の終りの方に

時なるかな五月廿八日は和州橋寺の開帳四十萬日の回向、阿彌陀池にて生まれれば、老若男女の別もなく、我もくゝと參詣し席を争ふばかりなり。

とあるのは注目すべき箇所、これは寶永二年五月廿八日から大和の橋寺の開帳四十萬日の回向が大阪の阿彌陀池にあつたのを當込んだものと考へられる。よつて本曲は浮名額の出た翌々年の五月末頃に作られたものと推斷を下してよいかと思ふ。

内容上浮名額の續篇と見られるもので、金五郎の死後再び勤めをしてゐた小さんは、曙屋大次郎といふ者に身請されて同棲中、ふとした事から金五郎の怨念に取憑かれて狂女となり、狂ひ廻つて人形屋で狂態を演じて居る處へ、金五郎の第八十郎が來かゝつてこれを見て氣の毒がり、大次郎と相談して、人形屋の亭主の勤めに従ひ、相共に阿彌陀池の開帳に小さんを伴ひ行き、橋寺住持の祈禱を受けた、その爲に怨念退散して

小さんは正氣に復し、金五郎は成佛するといふ筋である。

校訂用原本は輸入細字八丁本。原本に破損の箇所があつたが、對校本が得られなかつたので残念ながら少し赤字のままとして置くより致し方が無かつた。

### 椀久末松山

寶永五年三月三日から「新利届物語」の切として豊竹座上場。作者紀海音。海音署名の現存正本中最古のもの、作者四十六歳の作。

椀久の事蹟を主材とした物である。椀久の實説として世に傳へられる處によれば、彼は大阪御堂前の豪商椀屋久右衛門といひ、大阪新町の遊女松山に溺れて産を傾け、監禁された爲に發狂し炮烙頭巾のまゝて家を飛出した。それ故京五條坂の別邸で療養させ、平癒の後延寶五年九月七日に歿したといふ。(傳奇作書、蓑笠雨談等による)

この巷説は先づ俗謡にうたはれ、又芝居でも演じられたらしいが、現存のものとしては貞享二年二月刊行の「椀久一世物語」が最も古く、これによれば椀屋久兵衛は貞享元年十二月發狂して水死したやうに作られ、既にその時大和屋甚兵衛が舞臺にかけた事が文中に暗示されてゐる。これについては江戸の中村勘三郎座で貞享三年正月に「椀久浮世十界」と題して、三國彦作の椀屋久兵衛、まつ山の花村きぬえ、大友民部の中村七三郎、熊原利田之介の中村傳九郎等の顔ぶれて演じたのが古く、笹に飄箆を持った椀久狂亂の舞臺面が見せ場であつたらしい。一方上方に於ては大和屋甚兵衛は元祿十三年正月都萬太夫座で「傾城袖の海」の

外題で椀久を演じた。「松の落葉」(寶永元年刊)卷三に載せてある椀久出端の歌はこの時にうたはれたものであらう。この中には以前から謡はれた椀久の小唄が綴り込まれて居り、そしてこれが後の淨瑠璃の椀久狂亂道行の詞章の一原據となるものである。故に左にその歌を掲げて置く。

椀久出端

三よりたどり行く。今は心も浮かれそろ。誰かいく野を引抜きしより。いつの頃より相馴れそめて。通ふ心のいくせの思ひ。忍ぶつま戸を。ほとく

叩くは椀久か。きりととはく請けうかの。忍ぼかの。そつこで請出せ思はくを。これく請けたもの。あのや椀久は。これさく鼓の革か。のうほんへ。しんぞ心は。これさく。打抜いた。ほんほへしんぞのうほんへ。とかく戀には身をやつす。

斯の如く古くから小唄にうたはれ歌舞伎で演じられて名高いものであつたので海音は取つて淨瑠璃に作つたものと思ふ。筋のよく通つた纏つた作である。その荒筋をい



椀久浮世

大和屋甚兵衛

通ふ心

へば、椀久が松山に溺れて贅を盡し、井筒屋で節分の豆撒きの代りに五十兩の金銀を撒いて一座の者に拾はせて居る處へ親の久右衛門が来て、椀久が爲替銀五十兩を石瓦とすり替へて置いた財布で散々打つた上髻を切つて勘當する。椀久は舅義右衛門の許に監禁されて、猶松山を忘れ兼ねて居る處へ、廓を抜けて逢ひに來た松山は、椀久の妻おさんの貞節に感動して、椀久との關係を斷念して田舎の客に請出される決心をして歸る。椀久は悲憤の極發狂して狂ひ廻る途上請出され行く松山に邂逅し、身請の客の情義によつて松山は椀久の爲に解放されるのである。全體に於て後の近松の「霧の門松」を聯想させられる作柄である。

こゝで問題となるのは一中節の正本たる「椀久末の松山」との關係である。この作は外題が同一であるのみでなく、筋が同じの上に文章迄も同一又は類似の箇所が甚だ多く、大體に於て一中節の方が典麗の致に富んで居るといへる。海音の作よりはこの方が先で、しかも近松の作であるとの説もある。併しこの作中の椀



りよし界+

久色里の豆撒の條の

其時腕久高聲に一中 是より義太夫節をもく。地今宵節分の……

といふ箇所は注意すべきで、「是より義太夫節」とあるのは海音の作の方が先である事を暗示する一證とはならないのであらうか。又海音の作では軽く幫間風に扱はれてゐる一中が、一中節の方では相當重く扱はれてゐる上に、得意の「山めぐり」を語らせるとか、又はその弟子の半中が淨瑠璃を語る事迄も繰込まれてゐるのによつて考へれば、どうも後のもので、正徳頃の作ではあるまいかと思はれてならない。又作者についても私は違つた一つの推測説を抱いてゐる。それは同じ一中の正本に「けいせい内房成（助六後日心中）といふのがあ

るが、これは近松の弟子佐渡島三郎左衛門の作である。處てこの作を一中節の正本中近松の作といはれる

上巻 梶之木（かぎのき）の松山 都立（みやま）平車（ひらぐるま）本

久 松 節 中

「助六心中」及びこの「榎久末の松山」と比較して見るに、その文格筆致に於て三者殆んど同一程度で、共に近松の圓熟時代の世話物よりは一段劣ると思ふ。尤も問題となつてゐる榎久狂亂道行の文などには多少近松の筆も加つて居り、そしてこれが「天網島」のなまゝいだ念佛の中に引かれるに至つた因縁ではなからうかと想像して居るのである。

兎に角海音の「榎久末松山」は榎久物としては重要な位置に立つつ作で、義太夫劇の方では、この後享保十八年十一月竹本座上場の文耕堂の作「元日金年越」は本曲の改作であつて、榎久松山の情事に番頭嘉左衛門の好悪、榎久出入の某藩藏屋敷の出納役の公金私消事件、榎久の女房おさんと松山とは異母妹といふ因縁譚などを取合せて徒に技巧をこらした作である。後に操て演じられた「ゆかりの十徳」はこの下巻「物狂ゆかりの十徳」を出したものである。又一中節の方ではその「狂亂道行」は同流の語物として傳へられたのみ

上 けしき心房成 依後清三郎

うんちの門悪性けうろめさじ。うわらひの難いおま。こひでへお新町のわびまねよのぢりあふ。よろび倉のゆ六。

松久うくのうそこのむく

右は中李堂之公評令改板者也

都立一中

依後清三郎

浦島通徳川東へ町 正本堂六郎前板

でなく、その門弟宮古路豊後を経て豊後節にも傳はり、初代常磐津文字太夫によつて先づ江戸の市村座に於て「三重襲みへがねもろふね船」の外題で演じられ、更に又一方に於ては江戸長唄としては享保十九年に市村座に於て「二人梳久」が演じられたのが起原で今に傳へられて居る程である。その他梳久物は拾ひ上げれば澤山あるが餘り長くなるから略する。

校訂用京本、八行二十七丁本。

作者紀海音、姓は板並、俗稱喜

右衛門、後善八と改めた。父は鯛

屋善右衛門といひ、大阪御堂前雞

屋町に住み、菓子のお舗として知

られたが、傍ら俳諧を好んで安原

貞室の門に入つて貞因と號した。

兄は有名な狂歌師油煙齋貞柳であ

る。海音は寛文三年の生れで、近

松よりは十歳の年少であつた。初

め黄檗山悅山和尚の門に入つて高節と號して大和の柿本寺に居つたが、のち還俗して大阪に住み和歌を契沖





に學び、醫を業として契因といひ烏路觀と號し、又狂歌を兄貞柳に學んで貞我と號した。元文元年法橋に叙せられ、寛保二年十月四日歿した。享年八十。寺町法樹寺に葬る、法名清湖院海音日法居士。海音が作者として立つた年は明かでないが、「浮瑠璃譜」所傳の如く元祿十五年に竹本采女が語つた「傾城懷子」が彼の作であるとすれば四十歳の時からであるが、現存の正本を基礎として言へば、こゝに解説した通り四十六歳からである。それより竹本座の近松と對峙して専ら豊竹座の爲に筆を執り、その署名ある現存正本四十八篇に及び、享保八年七月六十二歳の時の作「傾城無間鐘」を最後とする。その作者生活を退いた理由は明かでないが、享保九年三月大阪大火以後兄の後を襲うて鯛屋の家督を相續した事及び近松が世を去つた事などが少くとも原因の一部をなしたのではなかつたらうか。

同 豪者大夫 毒緋 板

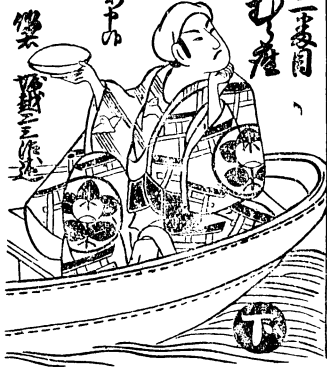
常盤津 常盤津 毒緋 佐末 毒緋

同 造酒大夫

元文元年



三重 船



【久松人二】 讀新年九 | 保享

富仁親王嵯峨錦

本曲の著作上場については、明和板「外題年鑑」には寶永六年六月豊竹座上場、享保五年三月更に豊竹座に二度目の上場といふ事になつて居る。

併しこれには疑問を挟む餘地があるやうに考へられる。先づ本曲第二段目に

ム、當年は丑の年、時は十月生れは辰にて金性。ハ、ア先づ辰は陽にて天子の形。丑の年の陽に應じ金性水と相生じ十月の陰を自得す。

とあるが、かういふ場合の干支は大抵著作上場の年のそれを基準として當込むのが、當時の淨瑠璃作者の常套手段であつた例から考へると、「當年は丑の年」といふのは、寶永六丑年とも又は享保六丑年とも取れるのであるが、これに對して第三段目に

甚五郎めも其以前武士商賣をせし時は、不義非道には傾かねど今町人となつたれば、仁義禮智の四つ寶は拂ひ仕舞うてきつぱりと、銀賣の細工人……とある文は、例の四寶字銀に代へるに享保新銀が改鑄されて行はれ出した事を暗示して居ると解すべきであ

鬚髮ハ

号ト

海

長

法橋

き

き

貞我名

法橋



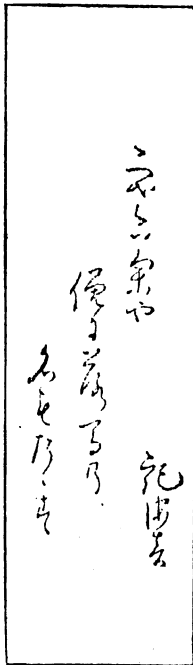
紀海音有像

るが、享保新銀は享保四年に鑄造されて享保六年十二月迄四寶字銀と併用されて居るのであつて、この間に丑の年に當るのは享保六年である。のみならず現存の正本は豊竹若大夫が享保三年正月受領して上野少掾と稱へてからの物である上に、他の海音の諸作と比較して、文の碎け工合などから見ては正に享保六年頃のもと言ひ度いのであるが、餘り古人の所説に異議を挟むも如何かと思ひ、こゝには姑く外題年鑑の寶永六年を初演といふ事を否定せずに置いて、更に研究して見度いと考へてゐる。

女繪師狩野雪姫と名彫工左甚

五郎とが、高雄の蟠海僧都といふ惡僧に強要されて、人質に取られた夫と母との命を救はんが爲に、一念を凝らしたる結果夢想によりて弘法大師の筆といふ小野小町の像と同一のものを製作するといふのを全篇の眼目とし、富仁親王(花園帝)がその兄宮に當る蟠海僧都の野心抑壓の方便として女帝なれど男装し給ふ爲に種々の波瀾を起す事を取合せた作で、發端に親王が嵯峨へ紅葉御覽の行幸の事あるに因んで外題としたものである。

第三段甚五郎内場は全篇の山であつて、後世の「京人形」の原據と見てよからう、又狩野雪姫の事は既に宇治加賀掾の正本「女繪師狩野雪姫」に仕組まれてゐるが、構想上彼よりはこの方が遙に勝れて居り、後



讀 案 書 繪 紀

の「祇園祭禮信仰記」の雪姫の藍本となつたものであらうと思ふ。

人物の取合せに時代錯誤甚しく、荒唐無稽の嫌はあるが、全篇の結構が大がかりで、場面の変化と詩趣とに富み、力の籠つて居る點に於て海音の作中出色の物といつてよからうと考へる。今日迄殆んど世に出なかつた稀觀書である。

校訂用原本は七行八十五丁本。

おそめたまごしら  
久松秋の白しぼり

正徳元年四月八日から豊竹座上場。作者紀海音。海音の世話物中名作の一つであると共に、後に及した影響も大きい。

大阪東堀瓦屋橋附近の油屋太郎兵衛の一人娘お染は子飼の丁稚久松と私通してゐた。然るに太郎兵衛は二人の仲を裂いてお染を親戚の山家屋へ嫁付けようとし、久松の在所の父も亦久松を強制的に實家へ連戻らうとした。よつて二人は家人が山家屋へ招待された留守中に情死したとい



ふ筋である。

この作の實説については從來心中否定説が行はれて居た。それによれば問題のお染は二歳の小兒で丁稚の久松が守をして居る間に誤つて溺死させたので、久松は主人の折檻を受けて土蔵に入れられて居る間に縊死した、それは寶永七年九月廿九日の出来事であつたと（一説に延寶七年とあるのは疑はしいといふ）。

これが海音の淨瑠璃に仕組まれた原事實であるといふが、私はさうは思はない。海音の淨瑠璃に先立つておそめ久松の心中事件は歌祭文にうたはれ歌舞伎で興行されて居る事を見通してはならぬ。

先づ歌祭文の方から述べる。お染久松の歌祭文は色々あるが、私が全文を見たものに次の五種がある。

(上) あぶらやおそめ久松心中

(下) おそめ松思ひのたね油

(上) おそめ心中白しほり

(下) おそめ涙のはらおび

(上) おそめ久松心中種油

(下) おそめ久松名残の夕せち

油屋おそめ形見おくり

(上) 油屋おそめみこの口

(下) 油屋お染梓弓

是等の中ではイが原作でロは語り出しの「是ぞことしのはつ心中」の句を「こひにうき名を流すなる」と改めただけである。(ハ)は後に述べる歌舞伎劇の筋を取入れて居る。(ニ)ホは外題から見ても後の物たるは明かだ、本文を讀んで見ればいよ／＼さうと首肯される。然らばこの第一の作たるイはいつ頃出来たものであらうか。これについて一つの傍證となるのは近松の「今宮心中」(寶永七年正月)の道行の次の一くさりである。

上 わづらわむ方久松中

らやまややまも、もをたどうはちち年所西宮をこの  
ひづりまのまもひのど年ぬらるぢともあつやれはと  
り娘よあそあををもたの久なりぢり三八のやまを  
よりのこひぬ松ツラまのびくよ藤あつと終所ちち養育  
あちぢりよん年ぬらるぢあままつくもまひもつて  
よありのつらひひるもをぬかむらゝのまをり  
し。ちもあをといさぐひ年ぬらるぢあままつくもまひもつて  
終ちちぬらるぢあままつくもまひもつてあままつくもまひもつて  
まのまをなんやあままつくもまひもつてあままつくもまひもつて  
わらまつくもまひもつてあままつくもまひもつてあままつくもまひもつて







おんはあそ何とぞを今とらよめりてゆきやうぞと  
 せんそらぬよよあつらふもつとぞあそあそよとぞとあふ  
 又もいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも  
 ぬきとぞあそあそいふとぞあそあそいふとぞあそあそいふとぞ  
 ああいの松ぞあそあそあそあそいふとぞあそあそいふとぞ  
 一の松と何とぞあそあそあそあそいふとぞあそあそいふとぞ  
 おあああそあそあそあそあそあそあそあそあそあそあそあそ  
 ああああああああああああああああああああああああああ  
 たいとああああああああああああああああああああああああ  
 とああああああああああああああああああああああああああ  
 丁ああああああああああああああああああああああああああ

歌瓦屋橋とや油屋の。油榨木の音に聞く。お染にそめし久松は。いつの時雨の一雫。洗へど落ちぬナヨイ戀衣。世に弘がりし仇し名を。よそに謠ひし音の葉や。其の油屋の一ふしも。師走油か。身の上にイ。かかる涙とこぼれそひ明日より同じ三味線に。のりの灯油屋の。オクリ回向をなすこそ。フ。哀れなれ。

不用意に讀めば行文の妙に釣られて氣がつかずに滑つて行きさうであるが、作者の頭にはお染久松の歌祭文の文句があつて筆を走らせたに相違ない。のみならず、おきさが好んだといふ歌祭文も或はお染久松のなどを暗に指してゐたのかも知れない。斯の如く「今宮心中」の上演頃には既にこの歌祭文は流行して居たといへる。而してその語り出しなる「これぞ今年の初心中」の句によつて見れば、心中のあつた年直ちに出したものと思はれるが、元文五年三月六日から大阪の角座で「卅三回忌袂白綾」を上場して居るのによつて逆算すれば、寶永五年の事になり、而も「今年の初心中」の句と合せ考へれば、寶永五年正月に情死事件があつたのを歌祭文に作つたとの推定を下したくなる。前にいふやうな小兒溺死事件からこんな歌祭文を捏造しようとは思はれない。

次にはお染久松が歌舞伎で演じられた事であるが、これは寶永七年正月大阪の萩野八重桐座で「心中鬼門角」といふ外題で興行されてゐるのが始めと思ふ。この臺本は東京帝大図書館所藏であつたが、去る震災で焼失したらしい。私は幸にしてその前に一讀して役割や梗概を手記して置いた。

その主要な役割は久松叔父岡村權左衛門音羽二郎三郎、岡村妾おつね富澤千代之助、おそめ萩野八重桐、久松松川常之飯、在所の親父中島賀十二、油屋女房玉村衛門、油屋五兵衛櫻山庄左衛門。芝居は二幕から成り、前の幕は岡村妾宅の場で、高麗橋の三井へ買物に行つた歸りに例の通りお染と久松が立寄ると、岡村とお

つねの計略の毘にかゝつて二人は縁を切るといふ誓書を書かされる。後の幕は油屋の場で、一同山家屋へ招待されて久松一人留守をして居る處へ在所の親が来て、お袋が叔父から色々話を聞いて心配して居る折柄夢見が悪いから是非連歸れといふので迎に來たといひ、久松は主人の歸る迄待てといつて親父を宿へかへす、入違ひに山家屋からお染が抜けて來た。土藏の中へ飛込んだ久松とお染はとゞ情死する。關係者一同集つて相談の結果、「主殺し」「不義の心中」の名を負はせ度くない爲にとて、久松を病氣の體にして駕籠に乗せて引取らせるといふのである。

茲に於て再び前の實説と稱へられる心中否定説を顯るに、寶永七年九月廿九日の出來事であるといふのが誤たるは明白であると共に、常識的に考へても心中否定説は否定して、歌祭文や「心中鬼門角」に作られた筋が事實に近いものであると認めざるを得ないのである。それと共に「鬼門角」に於て久松を病氣の體にして引取らせるといふ無理な脚色をした理由が、即ち心中否定説の生れると同じ動機に胚胎するものと解釋を下すべきであらう。

如上の材料と理由によつて私はお染久松は情死したものと判斷する。そしてその事件が歌祭文にうたはれ歌舞伎に演じられて大阪市中の大評判であつた。この人氣を利用してこの事件を淨瑠璃に仕組んだのが即ちこの海音の「袂の白しぼり」であるとは見度いのである。自然本曲の結構脚色は海音の創意に非ずして、歌祭文と鬼門角とに負ふ處が尠くない。而して歌祭文を海音が「地藏巡り」の夢の場に入れた趣向は頗る巧妙であると思ふ。次に鬼門角との關係を見るに、本曲上巻口の三井店頭の場の、

詞藤七は慇懃に……京大阪の菊合せ千歳の秋を八重桐が。舞臺衣裳の物好み。……コレは是になされま

せ。是を召したら取成りも八重桐に生寫し……

といふ箇所あたりは「鬼門角」で萩野八重桐がお染に扮した事を利かせた當り文句で、又その時の八重桐の舞臺衣裳が京大阪で流行した事を示すものである。尙兩作の結構を比較して見るに、後者は前者を巧に翻案して淨瑠璃に仕立てたもので、久松の叔父法印を武士上りとする處などは鬼門角の岡村權左衛門を知つて居た當時の見物には成程と思はせたものであらう。翻案といへば、久松が主人に下着の小袖を見つけられて箒で打たれる條は「五十年忌歌念佛」(寶永六年)の清十郎折檻の場が聯想されるであらう。

斯様な次第で、海音の傑作の一つと稱へられる「袂の白しほり」も、その原據その藍本を拉し來つて比較して見れば、從來の如く小兒溺死事件に暗示を得て創作したといふ場合よりは、その眞價を割引して見なければならぬ事となるであらう。併しお染久松の戯曲としては、實に本曲は劃期的のもので、これを義太夫劇の系統に見るも、彼の革足袋の意見で名高い「染模様妹背門松」(明和四年十二月、菅專助作)でも、野崎村の段で今尙舞臺に持囃される「新版歌祭文」(安永九年九月、近松半二作)でも、共に本曲を藍本としたのである。その他三都で演じられたお染久松の劇や淨瑠璃は非常に多いが、直接間接本曲に多少の關係を持たないものは無いといつてもよい。

校訂用原本は九行二十六丁本。

鬼おに鹿か毛け無む佐さ志し燈ちよか

正徳三年十二月一日から豊竹座興行。作者紀海音。

赤穂義士の復讐事件を材題とした所謂義士物の一で、義太夫淨瑠璃としては近松名作集上巻に收めた「碁盤太平記」に次いで出たのであつて、事件後十三年目に當る。「碁盤太平記」とは作の世界も別であり、主要人物の名のりも異り、全く違つた作意であつて、直接關係があつたとは思はれない。本曲の藍本となつたのは寶永七年六月十日から大阪の篠塚庄松座で興行された「鬼鹿毛武藏鏡」ではなからうかと思ふ。これは大當りの狂言であつて、九月十一日迄百廿日間も興行されたといふ。「古今いろは評林」に、

大阪にては寶永七寅年、篠塚庄松座に於て、吾妻二八作にて、則ち篠塚次郎右衛門大岸宮内の役、力彌には中興までつとめし佐野川万菊、若衆形の時これをつとめしが、歌舞伎狂言にての始として、此狂言大當りなるよしとて、中寺町正法寺日親堂へ繪馬に此圖をあらはし、次郎右衛門悦びの餘りに是を奉納なし、今に残れりとぞ。

とある程で、京の夷屋座も萬太夫座も大阪の柳山座もこれに刺戟されて秋にはいづれも義士物を興行した。されば當時に於ては最も名高い義士劇であつたに相違ない。海音が義士物を作るに當つて、粉本をこれに求めて趣向をこらさうとしたのは有り得べき事と考へられる。この芝居の筋が分らないから斷言は憚るが、外題の同じである事、主要人物が共に大岸宮内である點などから見て關係があつたらうと推察される。

小栗判官兼氏が岳父横山左衛門信久の強慾我意を憤り、管領の殿中、將軍義政の弟政知饗應の場に於て双傷に及んだので、小栗は切腹を命ぜられて領地を沒收された。遣臣大岸宮内が同志四十六士を糾合して遂に横山父子の首級をあげるといふ筋で、小栗横山の世界とした爲に、小栗の妻照天は小栗の遺骸を車に乗せて菩提所藤澤寺に運ぶといふやうな小栗判官で名高い筋が残つて居たり、又は横山左衛門の悴三郎迄が敵役と

なつて居るといふやうな疣贅が目につく。

並木宗輔の「忠臣金短册」(享保十八年十月)は本曲と「碁盤太平記」とをこね合せて技巧をこらしたものである。又本曲中の厭卷たる第三段目片桐源吾浪宅の場は後の近松半二の「太平記忠臣譚釋」の喜内浪宅の場の原據となり、第四段目の茶屋場で大岸が遊女揚卷を身請して刺殺す場は「假名手本忠臣藏」の力の段に影響を及してゐる。斯様な次第で、作全體としては佳作とは言ひ得ないが、義士劇の系統上に於ては大切な位置を占めて居るに拘らず、今日迄殆んど世に紹介されなかつた作品である。

序に附加へて置き度いのは、本曲にも又前の「梶久末松山」にも、その正本巻頭の外題の下に、作者紀海香と並べて「お山人形辰松八郎兵衛」とある事についてである。この外にも享保以前の豊竹若太夫の正本と思はれるものにこの形式を二三見るが、これは辰松八郎兵衛が豊竹座の創立時代に於て豊竹若太夫と相座元であつた爲と、又一つには、八郎兵衛は當代無雙のお山人形の名手であつて、元祿年間に竹本座にあつて腕を揮つて居たのを、河内屋加兵衛が豊竹座を起すに際して特に引抜いて來たので、作者の紀海香と相並べて人氣を呼ばうとしたからでもあつたかと思ふ。

底本は八行四十一丁本。

### 愛護若時箱

正徳四年十月朔日から豊竹座興行。作者は紀海香。

説經の語物の「あいごの若」と同じ材題の古淨瑠璃に「あいごの若」といふがある。元祿六年正月竹本座

興行の「都富士」はこの改作であり、而して本曲は又この「都富士」の改作といふ事になる。

古淨瑠璃の「あいごの若」は

寛文末年頃の刊行かと思はれる六段物である。二條藏人清平の子愛護若は初瀬觀音の申し子であつたが、雲井の前といふ若い繼母に思慕されたが應じなかつたので、雲井の前は侍女月さよと共に二條家の賣物やいはの太刀と唐鞍とを盗み出して賣却し、これを愛護若の所爲であると清平に讒したので、愛護若は家を逐はれ、叡山の叔父帥の阿闍梨をたよつたが怪んで入れられなかつたので遂に叡山東麓の霧生の瀧に投身した。のち悪人滅されて愛護若は山王權現に祀られるといふ筋である。

これに對して「都富士」は筋が稍複雑である。即ち二條清平の子愛護若と千原爲道の女鳩照姫とが清水詣


# 都富士

下  
高羽中がこれのたゞな本とて秋ま  
神もやゆりてあやうもまじりつらゆふ不  
くれねむるなまらりが不成務れまじりて  
まふまふふふふふ人のたぐりたる所  
まふまふにまふまふあられまふまふあ  
まふまふまふまふまふまふまふまふ  
下業まふまふまふまふまふまふまふ

都 富 士 正 本 題

に相契るに初まり、右大將有雄は謀叛を企てて、その目的貫徹の方便としてその女六條姫を清平の後妻として二條家の二種の寶物を盗み出させようとした。然るに六條姫は愛護若に戀慕したかかなはざるを恨んで清平に讒した爲に愛護若は家を追はれて志賀浦に入水し、六條姫照の二人も亦あとを追つて入水するといふ事に仕組まれて、愛護若と二女との三角關係と有雄の謀叛とが主眼となつてゐる。この淨瑠璃は近松の作であるとも言はれてゐるがどうであらう。元祿に入つて近松が自分の作品には署名するのを常とした義太夫の正本で、その署名のない作品を近松と推定するには相當有力な理由がなければならぬと思ふ。

本曲に於ては愛護若に對する六條姫照の戀争を六條姫與入以前よりの事とし、繼母となつてもその思ひ愈々切なるため清平の刃にかゝつたに拘らず愛着の一念が死後も執拗に附纏ふといふ趣向にし、鳥照と愛護は結局添遂げる事、清平を果斷正義の士とした事、忠臣早苗之介夫



井原西鶴の『浮城物語』の一場を寫したものである。此の一場は、愛護若と六條姫との戀争の最中、六條姫が清平の刃にかゝつたに拘らず愛着の一念が死後も執拗に附纏ふといふ趣向にし、鳥照と愛護は結局添遂げる事、清平を果斷正義の士とした事、忠臣早苗之介夫

**愛護若と六條姫の戀争**

初版 中版 後版

切 中 切 中 切 中

初版

切 中

中版

切 中

後版

切 中

愛護若名歌謡



妻の働きを鮮明に描いた點などにその特徴を見る。

寶曆三年五月五日から竹本座で興行された「愛護若名歌勝鬨」(作者竹田外記・吉田冠子・中邑開助・近松半二・三好松洛)は本曲を粉本として技巧をこらしたもので、

やいばの太刀を家寶として傳へた二條藏人清平と唐鞍を傳へる古曾部庄司千晴とは父祖の代から不和の間柄であるのに、清平の女八汐の前は千晴の子縫之丞友晴と、又友晴の妹鳩照姫は八汐の前の弟愛護若と互に相思の仲であるといふ宿命的の戀愛悲劇の動機を構へて、これに高階彈正が唐鞍とやいばの太刀とを奪つて天下を傾けようとする謀叛を取合せて筋を複雑にしてある。中段鞍打の段、龍骨車の段が最も技巧的である。(詳しくは「歌舞伎研究」第一輯の拙稿淨瑠璃解題を御参照を乞ふ)

校訂用原本は七行七十九丁本。

### 傾城思升屋

正徳五年五月五日から「吉野忠信錦着長」の切とし



## 竹本大和屋

# 竹本大和屋

あはれいさな... (Lyrics and commentary text for the play)

附 番 行 興 座 本 竹

て豊竹座に上場されたもの。校訂者の見た正本には作者名はないが、「聲曲類纂」には紀海音の作とある。

本曲の筋は頗る簡單である。大阪久寶寺町堺筋の升屋權兵衛は妻子のある身で、しかも忠實な手代市兵衛の意見があつたにも拘らず、馴染の遊女出羽を落籍して大津屋といふ瀬戸物店を営ませたが、二貫目の借金返済に窮して日頃の面目を失墜する苦境に立つた。權兵衛の氣質を知る出羽はそれと知らせず以前馴染の客であつた紙屋喜右衛門から金を借りて男の急を救つた。然るにこれを知つた權兵衛は嫉妬の眼を以て二人の仲を見るに至つた際、豫て出羽に心ある義弟喜兵衛が京都から下つて權兵衛の金に窮して居るのにつけて込んで縁を切らせようといや味を述べたので、權兵衛は喜兵衛を喜左衛門の廻し者と誤解し赫怒の極、出羽と喜兵衛とを斬り、自分も亦割腹するといふのである。

この作では、男主人公權兵衛を俠客式の面目一點張りの短氣な人物としその父をもこれに劣らぬ氣丈の老人としたのに對して、出羽は遊女上りに似合はぬ實意のある女として對照させて居るのが目につく。又「伊勢參り名所道行」を發端とし、森口の一里塚で非人の幽霊を出したり、升屋の場で子供に曾我の十番斬をさせたりして場面の變化を圖つて居るが、大體に於て極めて人情味に乏しく殺風景の感じがして、海音の冷やかな理窟づくめの特長を遺憾なく發揮して居ると共に、世話物と俠客物との中間に位するやうな作柄である。

これも今日迄活字に鰹刻された事は無かつた作である。

## 八百屋お七

八百屋お七は海音の作中でも最も名高いものの一つである。この實説は「天和笑委集」を始め、馬場文耕

の「近世江都著聞集」、「世事談」等を始めとして、「實事譚」などにその要を盡されてゐる。それによれば、お七の所刑は天和三年三月二十九日の事である。名高い事件であつたが、江戸はまだ文化が進まなかつた上にその筋の取締が厳しくて際物は出せなかつたからでもあらうか、小説戯曲に作られたのは却つて上方の方が早かつた。即ちその嚆矢といふべきは西鶴の「五人女」(貞享三年)の巻四戀草からげし八百屋物語である。事實が劇的である上にこの作が出たのでいよ／＼評判を高める事となり、歌祭文にもうたはれ戯曲にも仕組まれるやうになつた。歌祭文が西鶴の影響を受けて居る事は、その中に「五人女の三のふで、いろもかはりて江戸櫻」の句があるによつて明かである。元禄末年から寶永にかけては盛んに行はれたものと見え、「増補松の落葉」(寶永七年刊)「四河原涼八景」(宇治加賀掾作)の中に

祭文祓ひきよめ奉るの色のさかりはあづまなる八百屋の娘お七こそ。戀路の闇のくらがり。由なきこととを仕出して、罪は死罪にきはまりて、すぐに引出すあはれさよ。

とある。海音の「八百屋お七」が祭文の影響を受けて居る事は下の巻の「八百屋お七江戸櫻」によつて明かであるが、その上に巷説に基き西鶴の作意を雛案して作つたものと考へられる。

處が海音の「八百屋お七」著作の年月が實は明かでない。「外題年鑑」には寶永元年二月十五日から「八百屋お七歌祭文」を興行したとあるが、私はまだその正本も見ないし、又この時は豊竹座は一時退轉して居つたと考へて居るので、旁々直に従ふわけには行かぬ。次はずつと後れて享保十七年正月「八百屋お七戀緋櫻」を興行して居る。これは七行本と九行本を見たが、これよりは前の出板と思はれる八九行本の「八百屋お七」と同文である。のみならず既に享保二年十月に江戸の伊賀屋勘右衛門が出板した竹本喜世太夫手づ

上 八百八十七 翁の歌

ちまうてやまのうらふ本なるのわたれまづまあふ  
まこもあふ人共のあふりつてあふまこもあふ  
あふりつてあふりつてあふりつてあふりつてあふりつて  
あふりつてあふりつてあふりつてあふりつてあふりつて  
あふりつてあふりつてあふりつてあふりつてあふりつて  
あふりつてあふりつてあふりつてあふりつてあふりつて  
あふりつてあふりつてあふりつてあふりつてあふりつて  
あふりつてあふりつてあふりつてあふりつてあふりつて  
あふりつてあふりつてあふりつてあふりつてあふりつて  
あふりつてあふりつてあふりつてあふりつてあふりつて



# 下 各州の特色

各州の特色は、その地理的、歴史的、文化的背景によって異なる。以下、各州の特色を概観する。

北海道：自然豊かな土地で、農業と観光が主要産業。札幌は冬の観光地として有名。

東北：山岳地帯が多く、温泉资源丰富。仙台は東北の中心都市として発展。

関東：人口密度が高く、経済活動が盛ん。東京は日本の首都として機能。

中部：工業地帯として知られ、自動車産業が盛ん。名古屋は中部の中心都市。

近畿：大阪は経済の中心地として栄え、京都は伝統文化の宝庫。

中国地方：瀬戸内海に面し、観光資源が豊富。広島は原子爆弾投下を受けた土地。

四国：山岳地帯が多く、観光資源が豊富。高松は瀬戸内海の玄関口。

九州：多岐にわたる気候と地形を持つ。福岡は九州の中心都市として発展。


其 同

中  
一  
二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十  
十一  
十二  
十三  
十四  
十五  
十六  
十七  
十八  
十九  
二十  
二十一  
二十二  
二十三  
二十四  
二十五  
二十六  
二十七  
二十八  
二十九  
三十  
三十一  
三十二  
三十三  
三十四  
三十五  
三十六  
三十七  
三十八  
三十九  
四十  
四十一  
四十二  
四十三  
四十四  
四十五  
四十六  
四十七  
四十八  
四十九  
五十  
五十一  
五十二  
五十三  
五十四  
五十五  
五十六  
五十七  
五十八  
五十九  
六十  
六十一  
六十二  
六十三  
六十四  
六十五  
六十六  
六十七  
六十八  
六十九  
七十  
七十一  
七十二  
七十三  
七十四  
七十五  
七十六  
七十七  
七十八  
七十九  
八十  
八十一  
八十二  
八十三  
八十四  
八十五  
八十六  
八十七  
八十八  
八十九  
九十  
九十一  
九十二  
九十三  
九十四  
九十五  
九十六  
九十七  
九十八  
九十九  
一百

= 9

ま 人形竹田次郎五郎の正本「八百屋お七戀緋櫻」には作者紀海音と明記してあり、文も殆んど同じであるから、既に上方に於てこれより以前に出て居た事は疑ふ餘地は無いが、只私は「八百屋お七歌祭文」と現存の「八百屋お七」とが同物であるかどうかには疑を存じ、又その著作年月を明確にし得ないのを遺憾とする。

本曲は上中下三卷に分れ、上卷は吉祥寺の場、中卷は八百屋の場、下卷は牢屋前から道行、鈴ヶ森刑場と別れてゐる。上卷發端のお七濡れの場面は西鶴の雷鳴の夜に忍ぶ條の續案であるが、この場面を以て始めたのは悪くはないと思ふ。次に玉子酒の場で戸倉十内が吉三を打擲して苦諫する趣向は極端な武士氣質を示してゐて、時代物の諫言の場が迷ひ込んだやうな氣がするが、大詰で吉三が自害する伏線を布いたのであらう。中卷も西鶴の雪の夜的情宿なごりやどの續案で、吉三が床下で話を聞く趣向は「曾根崎心中」の天満屋の場で徳兵衛が縁下に忍ぶ條に似て居る。簀と笠を置いてすぐ歸



目次

八百屋お七恋緋櫻

小猿お七恋緋櫻

風流娘お七恋緋櫻

五段目	四段目	三段目	二段目	初段
(各段の目録)	(各段の目録)	(各段の目録)	(各段の目録)	(各段の目録)



るのは、お七の放火の動機を作る爲の技巧であらうが、こゝは西鶴の方が寧ろ徹底的で劇的である。鈴ヶ森で吉三が切腹するのは一五十年忌「念佛」の大詰を思はせるが、これは海音の好みでかう脚色したものであらう。他の作ではすべて吉三は出家するに、これのみ異彩を放つてゐる。

この悲劇の原因は下巻の牢屋前に於ける久兵衛の詞によく表れてゐる。即ち、

お七が爲に正眞よしみんの敵といふはこち夫婦。學問立つる家でもなし武士の一門持ちもせず。僅な八百屋商ひして。娘がいたづらすればとてさして恥にもならぬ事。お寺へ言うて早速に吉三を婿に貰うたら。今日のつらさはあるまいに。小家一軒建てうとて。いやがる縁を結びし故。むごい死にをばさするとて最期に親を怨めうもの。

といふのが極めて背緊に當つてゐる。家普請の爲に武兵衛から二百兩の金を借り、その代りにお七との結婚



附番の行興座竹園

を強要された時兩親は家の活計と借金に對する義理とだけに重きを置いて、一人娘をその犠牲として了つたのである。この點に於ては前のおそめ久松も亦その悲劇の根本動機は同一で、體面と義理との爲に戀愛が犠牲とされたのである。これは海音の世話物全體を貫く根本思想で、只それが主人公の自發的であるか、又は境遇上餘儀なくさせられるかの差異はあるが、要するに世間に對する體面と義理とに殉ずる事は同一で、而もその過程は非常に理想的であるといふ事が出来ると思ふ。

延享元年四月五日から豊竹座に上場された爲永太郎兵衛(千蝶)等の作「潤色江戸紫」は本曲の改作であるが、作者千蝶は江戸に下つた時小石川圓乗寺の八百屋お七の墓を一目した經驗や、江戸に於ける巷説などを取入れた上に、原作よりは武家的背景を非常に濃厚にし、吉三郎を以て主家の重寶松竹梅の一軸を探すために苦心する事とし、お七もこれを助け度い爲に悪人の奸計にかゝつて放火の罪に處せられるといふ風の仕組にしてある。更にこれを雛案したのが安永二年四月北堀江座で興行した菅專助等の作「伊達娘戀緋鹿子」で、この作ではお七は吉三をして天國の寶劍を主君に届けさせ度い一念で、火刑をも厭はずに夜半に火の見櫓の半鐘を打つて市中の門を開かせようとするといふ趣向を立ててある。これが歌舞伎のお七人形振の原據である。

お七に關する歌舞伎系統の劇や、豊後系の淨瑠璃や説經祭文に關する物などは非常に多く、これだけでも廣汎な研究題目であるから、今は一切この方面には觸れずに置く事とする。

校訂用原本としては八、九行廿六丁を用ひ、七行四十六丁本を對校用とした。

## 心中ふたつ腹帯はらおび

享保七年四月六日より豊竹座興行。作者紀海音。

お千代半兵衛の心中の實説については近松名作集下巻「心中宵庚申」の解題に述べて置いたからこゝには略する。

本曲の荒筋をいへばかうである、遠州濱松の土山脇十藏はその子半六が劍難の相がある故侍を止めさせよとの主君の情ある内命に従ひ、大阪新靱油懸町八百屋仁右衛門の養子となつて半兵衛と稱へて暮したが、一年人數改めに歸省中、女房千代が姑去りに逢つた。侍氣質の半兵衛は進退に窮し、女房と共に宵庚申の夜生玉馬場先大佛殿勸進所の門前で毛氈を布いて夫婦心中を遂げた。時に半兵衛は三十八、千代は廿四であつた。

二人の心中の動機を見るに、半兵衛の心中は彼の最期の場の言葉によく現れてゐる。即ち

女房を去るに七つの法。去らぬに三つの教あり。中にも親の氣に入らぬ女房に添ふは不孝なり。又去所なき妻を去るは夫の義にあらず。とくに暇をやつたらば孝行の道は立つ。しかしそなたの親里は。養ふ風情もない貧家。すりや去所ない同然。去るに去られぬ教なり。此二道に差詰まり斯くなりくだる。

といつて居る。半兵衛は女房を去らなくては孝に背く、さりとて歸る親里もないやうな女房を出すのは夫の義でないといふデレンマにかゝり、二人の切られぬ縁を腐り縁として、濱松で死ぬべき筈であつた命をこゝで義理の爲に捨てるのであると考へてゐる。お千代は既に書置にもあつた通り、離縁されても死ぬ覺悟であ

つた。されば別々にても義理と失望との爲に死すべき二人が、夫婦の情愛を機縁に手を携へて情死といふ形式に出たのであると見られる。

心中二つ腹帯と題したのは、最期に臨んで半兵衛がお千代の白縮緬の抱帯を二つに切らせて、自分が舊主への申譯に先づ切腹したその傷口を巻かせると共に、他の一筋でお千代の腹なる四月目の兒にせめての心と腹帯をさせて心中をするのでかういつたものである。

本曲は二人の情死の一周忌を當込んで興行して大當りを取つたもので、竹本座は十六日後れて「心中竹庚申」を出したが、興行上に於ては豊竹座に及ばなかつたといふ。萬象亭の「反古箱」にいふ、

近松は西の作者、海音は東の作者なれば、敵同志の如く立別れ、新淨瑠璃の趣向など一言半句を通すべきにあらず。然るに西の竹庚申と心中二つ腹帯とを見れば、いづれも八百屋の女房は善人なるを悪人、仁右衛門は悪人なるを後生願ひに振替へて書きたる事、孔明と周瑜が手の内に伏といふ字を書きたるが如し。達田辨二いふ、海音勝利にて豊竹座大當りければ、芝居より千日（法善寺のこと）へ石碑を建て供養しければ、彼の八百屋にて大に怒り、夜分石碑を芝居木戸前へ建てさせけるを、翌朝表方の者取退けんといひけるを、却つて景氣になるべき故其儘に置くべしと座本越前の指圖に依つて取退けずして建置きける。

此事どつと評判になり大入なりしと。

名高い話で面白い事ではあるが、近松と海音との作は全然暗合とばかりも言へなからう。十六日の隔りがあるから、近松の作には海音の影響があると考へられない事もあるまい。兩作の優劣については、既に廣く論評しつくされて居るから蛇足を添へるにも及ぶまいと思ふ。

本曲興行より二十年を隔てた寛保元年五月廿一日から豊竹座で「後三年奥州軍記」の切として「青梅撰食盛」と外題を變へて繰返されたが、心中狂言の興行を禁止された時代であつた爲に改題したのみでなく、結末をも書變へてある。それが爲に作意も變つてしまつた。参考迄にその部分を次に掲げて置く。

南無三寶おくれじと氣を取直し一心に。南無阿彌陀佛と双の先。のんどに當つれば身を悶え。手足をのべて苦しげな。中にも夫を打守り。打守りたる一念の。輪廻の心ぞ果でしなき。地イデ追付かんと半平も主のゆかりの一尺五寸。押戴き既にかうよと見えし所へ。お、い、く、と追手の者ども寄集まり。半平を見付けすがりつき刃物もぎ取り圓こなた



青梅撰食盛

が死んで恥の恥。ながらへるが孝行と。無理に伴ひ歸る朝露に。めぐむや竹の若緑根ざしをこゝに記しける。

即ち女は死し男は助けられる事になつて居る。その他は同文で、たゞ名前がおてう半平となつてゐるだけである。このおてう半平の名は後迄も用ひられた場合がある。例へば宮園節の「昔慕血汐むかしをたふしほのちかひ佛ほとけ」などもその一例である。

「二つ腹帯」はこの後舞臺にあとを絶ち「宵庚申」が繰返される事となり、又江戸劇場に於ては豊後節の地によつてこの道行の所作がしばしば演ぜられた。但し詞章は改められ、外題もそれごとく變つて居る。

九行二十九丁本によつて校訂した。

太平記 おぼたふみやあさひのよろひ  
綱目 大塔宮 曦鑑

享保八年二月十七日より竹本座興行。「太平記曦鑑」はこの改題。

作者については原版と思はるゝ十行本には本集に示したやうに近松門左衛門添削、作者竹田出雲掾・松田和吉とあるが、改題再版本と思はれる流布の七行本には單に近松門左衛門添削、作者竹田出雲とのみあるから、多くは竹田出雲の作と思はれて居る。併しこの時の竹田出雲掾は果して後の出雲掾清定であるかどうかは疑はしく、或はその父に當る出雲掾(享保年中近江と改め、享保十四年歿)であつて、座本たるが故に名を列ねたのではなからうかとさへ思ふが、それは一步譲るとしても、出雲よりはずつと先輩格であつて後に名作を澤山出して居る松田和吉が中心となつて、之に大近松が筆を加へたと見るべきである。松田和吉が後に名

を削られたのは、後に述べる筆禍事件の責を負つたのではなからうかと私は推測して居る。

本曲は太平記に材を採

つた長篇の五段物であつて、大塔宮が關東を滅す盟主となられて、無禮講に托して苟かに勤王の將士を召された。その有力な御方の一人として數へられた土岐頼員の妻は、夫のために實父たる六波羅の侍齋藤太郎左衛門を御方に引入れようとしたので却つて謀計が露顯して頼員は自害し、官軍は準備未だ成らざるを襲はれて敗れ、宮は一旦大和十津川の郷士戸野兵衛の許に潜まれたが、程なく勤王の士が諸方に蜂起して六波羅を滅し、齋藤は悲壯な最期

大塔宮大塔文藏

作者 若狭守藤原行成 松田永

大塔宮大塔文藏の物語は、太平記の五段物に採られた材を基として、作者の筆で描かれた。曲は、大塔宮が關東を滅す盟主となられて、無禮講に托して苟かに勤王の將士を召された。その有力な御方の一人として數へられた土岐頼員の妻は、夫のために實父たる六波羅の侍齋藤太郎左衛門を御方に引入れようとしたので却つて謀計が露顯して頼員は自害し、官軍は準備未だ成らざるを襲はれて敗れ、宮は一旦大和十津川の郷士戸野兵衛の許に潜まれたが、程なく勤王の士が諸方に蜂起して六波羅を滅し、齋藤は悲壯な最期

大塔宮文藏

をとげるといふ筋である。その場面をいへば、初段(大序)紫宸殿の段、(中)土橋の段、(切)無禮講、つはもの萬歳、六波羅の犬高橋最期の場。二段目(口)陣太鼓、(中)勢揃へ、(切)松原合戦。三段目(口)切子の段、(中)若宮短冊、(切)身替り音頭。四段目(道行)、熊野すゞかけ(口)義光錦旗奪還、(中)物狂、(次)兵衛館、(切)藤棚。五段目、齋藤最期。

この中では二段目の陣太鼓と三段目の身代り音頭の場とが最も勝れた場面であつて、齋藤は近松の「吉野都女楠」(正徳元)の小山田前司や「相模入道千疋犬」(正徳四)の安東聖秀などと同型の古老の武士で、剛骨頑強なる武士氣質を示す代表的の人物であり、胸中には慈悲心を抱きつゝも、表面には飽く迄大義親を滅すといふ態度を示す武士の理想が最も劇的に體現されてゐるので名高い。されば此作はその三段目を中心として後に操に於て繰返されたのみでなく、歌舞伎に於ても本曲初演の翌享保九年正月大阪中座に於て、又同十一年京都佐野川座に於て演じられたのを始めとして、屢々三都の劇壇に於て繰り返され「身替り音頭」として今もなほ舞臺に生命を有するのである。

本曲初段の「つはもの萬歳」の詞章を智略の萬歳といふ刷物にして時の人々が弄んだのを、同年六月其筋から禁止された。その事は月堂見聞集卷三十五、享保八年の部に出てゐる。その全文は左の通りである。

○六月十一日觸

町代

一、町々にて大塔宮囃鎧、智略の萬歳と申繪圖用候儀、無用に可仕候旨被仰付候、此旨町内銘々へ可被申聞候已上

私に云、右之繪圖之文語、徳若に御萬歳と、御代もさかえましますさず、是はきやうがる有様や、とき立歸





期の作には三好松洛とのそれが多いが、多くは文耕堂が中心であつたと見てよからうと思ふ。本名作集に收めたものなどがその代表作である。

### 須磨都源平躑躅

享保十五年十一月十五日より竹本座上場。作者は文耕堂・長谷川千四の二人。

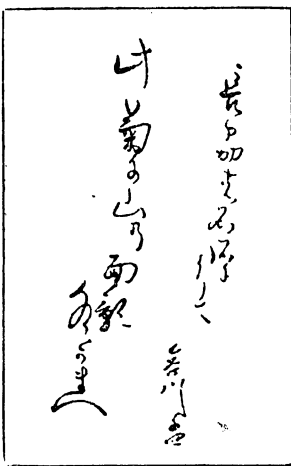
平家都落の際、薩摩守忠度は藤原俊成を訪うた時、その情人たる俊成の養女裡菊の兄岡部六彌太に急を救はれ、又無官太夫敦盛は青葉笛を右大辨重虎の手から取戻す迄扇屋若狭の許に扇折となつて忍んで居た折、熊谷直實の情義と若狭の女桂子の身代りとによつて捕手の難を免れた。のち一の谷の戦に於て忠度・敦盛共にその恩人にそれ／＼首を授けるといふのを骨子とした作である。第一段と第四段とは近松の「薩摩守忠度」の雛案であり、第三段は源平盛衰記の緒方傳説に基づいて脚色したものと思ふが、この仕組と第五段の重衡最期の條とは、頗る全篇の統一を破つて居る如く思はれる。本曲では緒方を尾形と書いてあるが、これは特に作意に關係があるので校訂の際もわざとその儘にして置いた。

第二段の切は「扇屋熊谷」の原作である。今日舞臺に生命を有する「源平躑躅」の扇屋の切には、本曲の脚色のあとに五條橋の場が附加されて居るが、これは天保三年二月大阪角座に於て始めて上場されたもので、三世歌右衛門の熊谷と江戸上りの七世半四郎の敦盛とで演じたのであるが、西澤一風が「一谷嫩軍記」の二の口組討を京都五條橋での牛若辨慶の格に當てて仕組んだもので大當りを取り、爾來行はれるやうになつたのである。(傳奇作書指遺、下、一谷嫩軍記須磨都の話)

外題名は、一の谷の戦に義経が躰躰谷に本陣を布く事に因んで、源平躰躰に源平の戦を利かせたものと思ふ。

作者長谷川千四 大和の人、始め長谷寺の僧であつたが還俗して淨瑠璃作者となつた。淨瑠璃の處女作は、大阪御堂前の敵討を仕組んだ「敵討未刻太鼓」(享保十二年正月竹本座上場)で、時に三十九歳。それより竹田出雲又は文耕堂との合作の下に竹本座の爲に数年作品を提供してその數十篇に及んだ。

然るに享保十七年人形遣の名手吉田文三郎及び當時四段目語りの名人と言はれた竹本大和太夫と相謀つて竹本座を脱退して別に一座を興さうと企てた。併しこれは不成功に終り、爲に千四は竹本座を退き、その翌享保十八年四月廿日に四十五歳で歿した。彼の同志大和太夫の死に後るゝ事約一ヶ月であつた。千四單獨の作は「敵討未刻太鼓」と「京土産名所井筒」(享保十四年十一月)のみであるが、共にすらりとした佳作で、作者としては未來があつたやうに思はれる。油煙齋貞柳は彼の死を悼んで「寂光の都は行きて歸らねば土産に作る淨るりもなし」とよんだ。俳諧では椎本才磨の門人であつた。



讀 盤 四 千 川 谷 長

鬼一法眼三略卷

享保十六年九月十三日より竹本座興行。作者は文耕堂・長谷川千四。

本曲の第一段・第二段は、源氏の方人であつた熊野の別當辨眞の子鬼若丸の出生から、書寫山の性慶阿闍梨の手で育てられ、のち自ら剃髮し、辨慶と名のる事、その辨慶の姉柳の前と義弟の鬼三太とが柳の前の夫鬼二郎の行方を尋ねて諸國を巡る事等を主題とし、第二段は京今出川なる鬼一法眼の邸に兵法の秘書三略卷を得んとして下僕となつて入込みたる牛若丸の虎藏と鬼三太の智恵内とが、遂にその目的を達すると共に鬼一の逃懐によりて、牛若が鞍馬山にて兵法を授けられし僧正坊は實は鬼一たるを知る事、第四段は一條大藏卿が偽せ阿呆となりて常盤以下の源氏の與黨庇護の事、第五段は五條橋に於て牛若丸辨慶と主従の契を結ぶといふに終る。

鬼一法眼の事は義經記の卷二にあるので世に知られて



虎之巻

居るが、本曲に於てはこれに鞍馬天狗の傳説を合體させて趣向をこらしたものである。鬼一法眼の事を淨瑠璃に仕組みたるものには山本土佐掾の正本かと思はるゝ、「辨慶京土産」があるが、これでは牛若が鬼一の娘千鳥と契つて一子千代若をあげたが、鬼一は平家を憚つて千代若を加茂川に沈めるといふ仕組になつてゐて、本曲とは趣を異にしてゐる。(藤井博士校註近松全集第三卷參照)

本曲の第三段が「菊畑」の原作であり、第四段の檜垣の茶屋から大藏卿邸も亦名高く、第五段は五條橋の前驅をなすものといへる。のみならず嘉永二年九月河原崎座に於て市川海老藏の鬼一法眼、岩井兼三郎の牛若丸で演じられた新十八番之内虎之巻は、本曲の「菊畑」から脱化して本行式となつたものである。

作中に多くの兄弟縁者を主要人物として働かせて居る點は、「雪女五枚羽子板」を聯想させる趣向であるが、鬼一・鬼二郎・鬼三太の三人の兄弟が表面敵と味方とに分れて居りながら、内心に於ては同じく源氏に對して忠義の士であつた事は菅原の松王・梅王・櫻丸の成立に對してある暗示を與へて居るやうに思はれる。

歌舞伎で初めて興行されたのは、享保十七年三月大阪角座で、鬼一姉川新四郎、大藏卿嵐勘四郎、皆鶴姫藤井花松、牛若淺尾元五郎等の役割。次いで同年九月に中座でも興行された。

### 壇浦兜軍記

享保十七年九月九日から竹本座興行。作者は文耕堂、長谷川千四の二人。

近松の「出世景清」の改作で、景清は頼朝を討つて平家の仇を報じようとして苦心するに對して、箕尾谷四郎とその縁者たる根の井大彌太親子は景清を擁へて鏝引の恥辱を雪がらとして肝膽を碎いたが、景清は終に長濱

の根の井の邸普請場に於て箕尾谷に捕へられて入牢したが、機を見て牢を破つて奸物岩永を屠り、兩眼をくり抜いて日向勾當となつて西下するといふ筋で、箕尾谷を以て景清の年頃尋ねる弟であるとして、それに捕へられるといふ處が技巧の山である。

第三段目の口琴責の段が最も有名である。この場の岩永の詞に

阿古屋めが懐胎。もしもや此兒が女の子なら。琴ぢやくわんく三味線で。ア、なんとやらと京中が諷ひし。此前表。

とあるのは、前の「鬼一法眼三略卷」の第二段道行の中の

二十歌もしもやツンテツトン。此子がや。みやげといはばよいそりや。えいずんどえ。琴ぢやトキキンノ。しやみせてツ、テツトン。うたうて聞かしよえいそりや。えいずんどえ。

といふのを利かせて居る。

又阿古屋の兄井庭十藏が景清と瓜二つの容貌なのを利用して景清の身代りにならうとする第二段の辻講釋小屋の場は、後の「二人景清」の依つて生れる元となり、第四段の普請場の屋上立廻りは「八犬傳」芳流閣の屋根上の格闘の藍本であるといはれる。

初めて歌舞伎で演じられたのは、享保十八年三月三日からの大阪角座の興行であつて、阿古屋芳澤あやめ、岩永藤川平九郎、重忠・箕尾谷嵐三右衛門であつた。江戸では元文二年河原崎座の顔見世狂言に「閨月仁景清」といふ外題で、二人景清の趣向を立てて原作をもぢつて興行した。その琴責の場の模様は「歌舞伎年代記」には次のやうに見えてゐる。

梶原と重保の兩人にて、あこや人丸に景清がありか詮議。雪責のところへ、海老藏重忠羽折のなりにて、生酔にて妻あさり菊松に、傘をさしかけさせて出で、某が責めようわと、人丸姫に琴を調べさせ、阿古屋には三味線をひかせ、音色に耳をそばだて、異國本朝のためしを引いて本多平六に言ひつけ、手水鉢の陰より景清を見つけ出すを、梶原には新參の下人、七兵衛といふものなりとて此場を見のがす所大評判。

あしやだうまんおほうちかみ  
蘆屋道満大内鑑

享保十九年十月十五日より竹本座興行。作者竹田出雲。

信田森の白狐と安倍保名と契つて安倍晴明を生んだといふ有名な信太妻の傳説に基づく戯曲中の代表作であつて、今猶舞臺に生命を有する名高い作である。

信太妻の傳説は古く「日本靈異記」や「水鏡」などに見えて居る狐が人の妻となつて子を産むといふ古傳説に式神を使つたといふ陰陽道の名人安倍晴明の出生を附會して、彼の素性を神秘的にし、又その人の後世に遺した方術を超人間的の靈能あるものとしようとした結果成立つたものと思ふが、その代表的なるは正保四年刊行の「篋抄抄」の所説である、曰く、

彼ノ晴明ガ母ハ化來ノ人也。遊女往來ノ者ト成リ往行シ給フチ、猫鳥ニテ或人ニ被レ留、三年滯留有ル間ニ今ノ晴明誕生有リ、既ニ童子三歳ノ暮歌ヲ一首連ネ給テ曰ク、戀シクハ尋ネ來テ見ヨ和泉ナル信太ノ森ノウラミ葛ノ葉ト讀給ウテ撒消ス様ニ失セニケリ。故ニ晴明上洛ノ砌、先ヅ母ノ讀置キシ歌ヲ如何ト思ヒ、和泉國へ尋行キテ信太森ヲ尋入りテ見レバ、社壇在レ之、伏拜シテ母ノ様子ヲ祈誓スレバ、古老經タル

狐一疋我が前ニ出来り、我コソ汝ガ母ナレト言ヒテ失セニケリ。是信太ノ明神ニテ御座スナリ。  
とある。而して「簗掻抄」には晴明道満行力争の説話もあるが、是等によつて信太妻の戯曲は作られたものと思ふ。

さて信太妻の戯曲としては延寶六年刊行の山本角太夫の正本「信太妻」が原作であると思ふ。河内の守護職石川悪右衛門がその妻の難病平癒のために兄の蘆屋道満の言に従ひ、若い牝狐の生膽を取つて服用させようと泉州信太の森で狐狩をした際、こゝへ参詣の攝州安倍野の城主郡司保秋の子保名が一匹の白狐を助けたのが縁となつて、危急を救はれ、その狐の化現の女と契つて阿部の童子を儲けた。童子七歳の時童子の母は籬に咲亂れた菊に見とれて狐の姿を現して童子に見られたので、「戀しくば……」の歌を障子に残して姿を消す。のち童子は晴明と名のり、大内に召されて道満と行力争ひをして勝ち、重く用ひられるといふのが荒筋である。古淨瑠璃としては、結構も整ひ、場面の變化にも富み、詞章も典麗である。



「妻太信」



次に出了正徳三年豊竹座興行と考へられる紀海音の作「信田森女占」は、この角太夫の「信太妻」の改作である。攝州の安倍の郡司安秋の子保名は繼母と悪臣との迫害を避けて信太森附近に閑居し、狐の化現たる葛の葉と契つて一子をあげて育てて居た。葛の葉は保名の妹萬蒲の前と石川悪右衛門との結婚の夜、女占ひに扮して阿倍の邸に赴いて、悪右衛門の兄蘆屋道滿と行力争ひをして之に勝ち悪人の奸計を計いたが、釣狐の計にかゝつて野干たる本性を顯した爲に姿を消す。その子が陰陽道の妙を得て大内に召され、父保名も世に出るといふ筋で、原作よりは技巧澤山で、且つお家騒動の色彩が濃厚になり、夢幻的の妙味が減じて居るやうに思はれる。

以上の二作及び既にこれより以前に歌舞伎でも演じられた作を總合した上に、更に結構を大がかりにし、筋を複雑にし、場面の變化を多くしたのが即ち本曲である。第四段が全篇の山であつて、保名内の段、道行信太の二人妻、草別れの段、童子問答、二人奴の段とかうなつてゐるが、この中保名内の段が最も名高く、そ



の切なる狐貉の葉子別れの場面は、恐らくは角太夫の「信太妻」の同じ場面の影響を受けたらうと思はれる近松の「百合若大臣野守鑑」の第三段目の立花が遊城丸に別れを惜しむ場面に負ふ所が尠くないと思ふ。太田南畝の「俗耳鼓吹」に「百合若大臣野守鑑」を評して、

島中ノ事妙々、鷹化爲レ女妙一層、母子ノ情態宛然如レ曙、俊寛島物語及道満

大内鑑子別等、不レ能レ出ニ此範圍中一。といつて居る。

本曲は人形芝居に於ても度々繰返されて居るが、四段目迄通した場合よりは、他の曲と取合せて四段目だけを出して居る場合が多い。

歌舞伎で演じられたのは、寛延元年八月大阪の角座興行が初めて、次いで寶暦元年閏七月には大阪中座、同十一年四月には又角座、江戸では元文二年九月中村座上演が初めてである。

淨瑠璃の他流の語物としては、詞章の残るものに宮古路豊後の正本「二人妻名残の信太」宮古路縫太夫の

「妻人二別田信」

正本「信田の別二人妻」、宮古路綱太夫の正本「葛葉狐別の段」等豊後系のものが多い。清元の名曲「保名」(文政三年七月都座初演)が本曲の第二段「小袖物狂」の改作たるは世に知られた事である。(本曲については、詳しくは歌舞伎研究第五輯の淨瑠璃解題の拙稿御参看を乞ふ)

作者竹田出雲 初代竹田出雲の二男千前軒と號す。享保年中父の名跡をつぎて出雲掾清定と稱へ、父の後を承けて竹本座の座本となる。興行上の手腕勝れ、人形遣の名人吉田文三郎を始めとして一代の名手をその座に集め、又人形の衣裳及び道具建を美にして操芝居の面目を一新し、歌舞伎劇を壓倒して操の黄金時代を現出せしめたるに與つて功甚だ大である。又兼ねて淨瑠璃作者として手腕を振ひ、その署名あるもの三十四篇の多きを數へる(但し「櫻町昔名花」は正本の所傳あるを聞かず)。この中十二篇の正本は出雲一人の名を署するのみなれど、他



清元巳三次郎  
清元延壽次夫  
清元富士太夫  
清元政太夫

三清沢万吉  
法清元安次

板日付格  
元今五并格  
元日市

曾我梅初念方建

作者 鶴屋南小  
篠田金次

都産



才二ばり大切

清元巳三次郎  
清元延壽次夫  
清元富士太夫  
清元政太夫



作 性公の御後、かまのふしを、  
清元巳三次郎、清元延壽次夫、  
清元富士太夫、清元政太夫、  
曾我梅初念方建

尾上菊六郎  
小神物今五并格

中村 辰右衛門  
辰右衛門

紙表繪「名保」元清



内義弘に繩をかけて来る。苺萱道心は、助けるも殺すも私には計らひ難し、都へ行き奏聞し命乞をしてやれ、それを我子石童が筑紫へ送る。輦いへつとぞといふに終る。

苺萱の傳説は謡曲の「苺萱」に作られ、又早く説經に仕組まれて名高いもので、信州善光寺の親子地藏の縁起を主想とし、既に寛永版さへもあるが、注目すべきは寛文二年版の「かるかや道心」である。これは

第一 かるかや道心の事

第二 御臺若君都へ尋ね上り給ふ事

第三 石童丸黒谷を尋ね給ふ事

第四 高野の卷井大師の由來の事

第五 石童丸山へ尋ね登り給ふ事

第六 苺萱父子善光寺に地藏にいはれ給ふ事

といふ六段から成り、加藤繁氏は廿一歳の時花の落るを見て發心し、新黒谷にて出家した。當時十九歳の御臺は妊娠七ヶ月であつたが、その子は生れて石童丸と呼ばれ、十三歳の時母と共に父を尋ねる事となり、黒谷から高野と父の跡を追つて、漸くにして尋ね會つたが、母は學文路の玉屋で病死したので、石童は獨り歸國した



寛永版「かるかや」





頃から宗輔と改めた。延享二年から並木千柳の名を以て竹本座の作者に列し、竹田出雲・三好松洛等との合作十一篇に及びこの中には傑作が多い。竹本座に止る事前後六年、寶曆元年豊竹座に歸り、「日蓮上人御法海」の添削をなし、更に「一谷嫩軍記」の三段目迄を作つて、此年の秋世を去つた。享年五十七。尤も宗輔の歿年については、寛延二年、寛延三年等の説もあるが、それでは作品との關係上年代的に矛盾が起る事となる。並木永輔・並木丈助(後に丈輔)並木正三等がこの門から出た。序に一言附加へて置き度いのは、田中千柳と並木千柳とは別人である事で、この人は豊竹座初期の作者であつたが、享保十年同座の作者たる事を辭して京都へ上つて了つたのであつて、宗輔の千柳は二代目の千柳になるわけである。

敵討檻樓錦 かたきうらつづめのごき

元文元年五月十二日より「十二段長生島臺」の切として竹本座で興行されたもの。作者は文耕堂・三好松洛。

上・中・下三卷より成り、上卷は先斗町の段で、春藤助太夫のだまし討、中卷は春藤屋敷の段、若黨伊兵衛・佐兵衛の妻女身賣の段、道行に分れ、下卷は馬乗の段、非人の段、敵討の段より成り、非人に身をやつして大和大曼寺堤の三昧に起られし



りよ「磨達血谷櫻州加」



て敵の行方を探索してゐる春藤次郎右衛門は返討に逢つて重傷を負つたが、高市武右衛門に助けられ、その後援によりて首尾よく本懐をとげるといふ筋で、これより後に出る敵討物戯曲の原型をなす名作といつてよいと思ふ。

「非人敵討」は寛文四年大阪の役者福井彌五左衛門が二番續に脚色して門弟荒木與次兵衛をして之を演じさせて好評を博し、降つては享保期の名優姉川新四郎の得意の藝として屢々演じたものであつた。これについては「佐渡島日記」の次の記事は注目に値する。

非人敵討の狂言は、中古姉川新四郎此仕内を始めて、仕出せしやうに若き人は思へども、非人敵討の狂言は、むかし荒木與二兵衛といへる立役仕始めたり。其時の姿は病かづらにて、随分くろくと油を付け、顔のつくりも白粉濃くぬりうつくしくし、衣裳は白小袖の無地、大廣袖紅絹うら、花色の丸ぐけ帯を前に結び、手足も随分白くして出立せられし由、是予が親傳八話にて聞傳へたり。

愚按、元祖坂田藤十郎申されし、非人の心得やはり自分の考にてなし、古人申置きたる事此荒木與次兵衛のせられし非人敵討の出立にて藤十郎申されしと符合せり。これを思へば、姉川致されし非人の心得は、雪と盪ほど違ひとは此事なるべし。新四郎非人の仕打よき故、人々毎度申出すなれど、心得は甚だ拙し。是姉川を譏るにはあらず、古人の説と合しての論なり。仕打も古へとは甚だ野卑なり。試し物に來りし加村宇多右衛門がせりふに、敵討といふは命惜しきにいふと散々責めかける時、竹に仕込みし刀を抜き差付け、青江下坂二つ胴に敷腕ずんどう切れますへ、と笑ふ。荒木氏始めてせられしは、青江下坂二つ胴に敷腕といひ聞かせ、差付けたる刀を兩手に持ちながら、左の方へ引寄せ、調子を低く、ずんどう切れますへ、

へ、と會釋する。此善惡は後の藝者考へ見るべし。これは非人敵討の眼目たる大曼寺堤の場の春藤の演出法に關する荒木與次兵衛と姉川新四郎との相違について、寫實主義の是非を論じたものらしく思はれる。その論旨の當否は措くとして、今日でも「大曼寺堤」の山となつてゐる「青江下坂二つ胴……」のセリフは既に荒木與次兵衛時代からあつて、やはり山であつた事がわかる。而して姉川新四郎の非人敵討と本曲とはどちらが先かといふに、確證はないが本曲が作られてから九年後の延享元年二月刊行の役者評判記である「役者紋二色」に「姉川殿二月六日より大和國非人敵討五段續に春藤次郎右衛門の役、幾度か見物致したれども見飽かぬ上手藝」とある。姉川新四郎の藝歴から見れば、此頃は既に晩年といふべきであるから、享保年間より演じて居たものと見て差支ないと思ふ。自然この名優の演出法が本曲によつて操に入られたと見る事が出来よう。而して本曲は操芝居に於てこの後しばしば繰返されたのみでなく、逆に

九十月九日  
**大曼寺堤**  
此の戲は、非人敵討の眼目たる大曼寺堤の場の春藤の演出法に關する荒木與次兵衛と姉川新四郎との相違について、寫實主義の是非を論じたものらしく思はれる。その論旨の當否は措くとして、今日でも「大曼寺堤」の山となつてゐる「青江下坂二つ胴……」のセリフは既に荒木與次兵衛時代からあつて、やはり山であつた事がわかる。而して姉川新四郎の非人敵討と本曲とはどちらが先かといふに、確證はないが本曲が作られてから九年後の延享元年二月刊行の役者評判記である「役者紋二色」に「姉川殿二月六日より大和國非人敵討五段續に春藤次郎右衛門の役、幾度か見物致したれども見飽かぬ上手藝」とある。姉川新四郎の藝歴から見れば、此頃は既に晩年といふべきであるから、享保年間より演じて居たものと見て差支ないと思ふ。自然この名優の演出法が本曲によつて操に入られたと見る事が出来よう。而して本曲は操芝居に於てこの後しばしば繰返されたのみでなく、逆に

非人敵討  
**大曼寺堤**  
此の戲は、非人敵討の眼目たる大曼寺堤の場の春藤の演出法に關する荒木與次兵衛と姉川新四郎との相違について、寫實主義の是非を論じたものらしく思はれる。その論旨の當否は措くとして、今日でも「大曼寺堤」の山となつてゐる「青江下坂二つ胴……」のセリフは既に荒木與次兵衛時代からあつて、やはり山であつた事がわかる。而して姉川新四郎の非人敵討と本曲とはどちらが先かといふに、確證はないが本曲が作られてから九年後の延享元年二月刊行の役者評判記である「役者紋二色」に「姉川殿二月六日より大和國非人敵討五段續に春藤次郎右衛門の役、幾度か見物致したれども見飽かぬ上手藝」とある。姉川新四郎の藝歴から見れば、此頃は既に晩年といふべきであるから、享保年間より演じて居たものと見て差支ないと思ふ。自然この名優の演出法が本曲によつて操に入られたと見る事が出来よう。而して本曲は操芝居に於てこの後しばしば繰返されたのみでなく、逆に

九十月九日  
**大曼寺堤**  
此の戲は、非人敵討の眼目たる大曼寺堤の場の春藤の演出法に關する荒木與次兵衛と姉川新四郎との相違について、寫實主義の是非を論じたものらしく思はれる。その論旨の當否は措くとして、今日でも「大曼寺堤」の山となつてゐる「青江下坂二つ胴……」のセリフは既に荒木與次兵衛時代からあつて、やはり山であつた事がわかる。而して姉川新四郎の非人敵討と本曲とはどちらが先かといふに、確證はないが本曲が作られてから九年後の延享元年二月刊行の役者評判記である「役者紋二色」に「姉川殿二月六日より大和國非人敵討五段續に春藤次郎右衛門の役、幾度か見物致したれども見飽かぬ上手藝」とある。姉川新四郎の藝歴から見れば、此頃は既に晩年といふべきであるから、享保年間より演じて居たものと見て差支ないと思ふ。自然この名優の演出法が本曲によつて操に入られたと見る事が出来よう。而して本曲は操芝居に於てこの後しばしば繰返されたのみでなく、逆に

「福 禮 禮 合 殿」

歌舞伎へも移入されて、謂ゆる「大晏寺堤」の原作となつたのである。

明和元年九月九日から大阪角座に於ては、姉川新四郎の十七回忌追善として、「織合襷摺錦」と題して、本曲を多少改めて中山文七の春藤次郎右衛門で興行し、之に對して中座では九月十日から「禮服襷摺錦」の外題で、嵐雛助の春藤、道行は伊兵衛嵐三五郎、佐兵衛嵐七五郎で人形仕立にして角座と競争して、大いに非人敵討の熱をあふつたが、結局角座の方が好評で、これより後は歌舞伎の非人敵討には「織合襷摺錦」が行はれたのみでなく、文政三年九月の御靈の操芝居ではこの外題で道行と大晏寺堤の段とが操芝居でさへ興行されたのである。

釜淵雙級巴

元文二年七月廿一日より豊竹座興行。作者並木宗輔。石川五右衛門を題材とした最初の淨瑠璃は松本治太夫の一石川五右衛門である。年代作者共に不明であるが、

附 番 演 初



が、釜煎は見せ場であつたものであらう。

此義賊といふ想を受繼いで、これを吉岡憲法の事件と結托させたのが近松の「傾城吉岡染」(正徳二年作)である。此作では石川五右衛門は兵法の師匠たる憲法の爲にする生活の資に窮して、ふとした誘惑より遂に強盗となり變幻出沒の妙を極めたが、憲法親子を救はうとした爲に捕へられて、釜煎の極刑に處せられるといふ事になつて居る。五右衛門が盜賊となつたのは、彼に言はせると「巧んで是を始めず、我人盜みの始まりは、自然と先から持つて來て盜めと言はぬばかりなもの、その堪忍が佛の手引、そこを堪へず盜み取る、それこそ天魔の導きなれ」といつて居るが、その徑路が此作には巧妙に描かれて居る。そして五右衛門は盜賊となつてからも「我が盜みはもと主君のため師匠のため」と思つてゐたのであつた。

本曲は釜煎の場は前の作を大體に於て踏襲して居るが、一篇の主人公を石川五右衛門として、「傾城吉岡染」の憲法と傾城吉岡との關係を續案して五右衛門と瀧川との關係とすると共に、憲法と吉岡との間の子を五右衛門と先妻お律との間の子に作り變へ、又五右衛門は後になつては心ならずも周圍の事情に引きずられて強盜を働いて居るが、義理も人情も辨へた、所謂人間味の多い五右衛門として描き出されて居るのが特徴であると思ふ。上巻は河内美豆野狩場騙りの段より島原澤湯屋の瀧川盗出しの段迄、中巻は柳の馬場當馬浪宅より五右衛門住家の織子いぢめより瀧川本心告白迄、下巻は藤の森の刀賣、五右衛門父子召捕、七條河原釜煎に終る。中巻織子いぢめと下巻釜いりいぢめとが名高く、他流でも取つて語物とした程である。

本曲の改作に「石川五右衛門一代噺いぢめ」といふのがある。並木正三の作で明和四年十月十四日から竹本座で興行された。石川五右衛門は伊豆の大名花房家の老臣堤當馬之丞の女と當馬の甥岩木兵部との間に生れた私

生兒で、堤家の奴伊達平の兄萬作の郷里石川村で生長し、主家没落後、その遺孤お此を守り立てる爲に義賊となり、遂に主家の重寶遠州流の茶器七種ななこころを手に入れて主家を再興させ、自分は釜煎の刑に處せられようとする時特赦されて出家するといふ筋である。

此外に石川五右衛門の戯曲としては、淨瑠璃では犀が崖の來作住家や壬生村の小冬殺して名高い「木下蔭狭間合戦」(寛政元年二月)や、歌舞伎では「金紋五三桐」(安永七年)を始めとして澤山あるが、只今はその穿鑿には觸れる必要もあるまいと思ふ。

ひらかな盛衰記

元文四年四月十一日から竹本座興行。作者は文耕堂・三好松洛・淺田可啓・竹田小田雲及び千前軒の五人であるが、文耕堂が立作者である。

木曾義仲の滅亡より一谷の合戦に至る迄の間に於ける義仲の關係者と梶原源太親子の動靜とを主題とした

宮原新美矣 同 佐賀美  
 七条 同 志賀美  
 河原 同 和太夫  
 余満五級巴  
 上之巻 三線 竹本座  
 針の尻 けいこ 甲依子

りよ「巴級及訓箋」夫大賀加路古宮

作である。而して三段目迄は木曾義仲の遺兒駒若を守立てようとする人々の苦心とそれに伴ふ波瀾葛藤とを  
 中心にして、これに樋口の次郎の復讐計劃を取合せて想を構へたもので、第三段目の松右衛門内より逆櫓を眼  
 目とする。四段目は梶原源太の母と遊女梅が枝との源太に對しての一人は母として、又他は情人としての眞  
 實の愛情を中心としたもので、無間鐘のむげんかね  
 趣向が頂點をなして居る。

無間鐘の趣向は既に元祿時代より暫々  
 劇に仕組まれて來たが、本曲によつてい  
 よく著名となつたものである。今その  
 系統を概観しようと思ふが、それには「歌  
 舞伎年代記」の享保十六年春「傾城福引  
 名護屋」興行の際の次の記事が要を得て  
 居る。曰く、

無間の鐘の事、遠江國小夜郡西山村に  
 無間山觀音寺の釣鐘を撞けば、未來は  
 無間地獄におつると雖も、此世にては富貴の身となるといへる事を狂言に取組み、元祿二巳年大阪荒木與  
 次兵衛座にて、傾城小夜の中山といふ名題に、谷島主水といふ若女形、けいせい裏葉にて鐘を撞く所作始め  
 なり。其後元祖芳澤あやめ、京都早雲座にて鐘をつく、其時の所作は水木辰之助、すなはち元祿十四年の事

傾城小夜の中山といふ名題に、谷島主水といふ若女形、けいせい裏葉にて鐘を撞く所作始めなり。



傾城福引名護屋 中村庄 二番目  
 長谷川菊之丞

長谷川菊之丞の所作

演所年六十保享「鐘のりむ」

なり。又享保十三年春、京市山助五郎座にて、瀬川菊之丞、庄屋六右衛門娘おすまにて勤むる。此時趣向をかへ、手水鉢を鐘になぞらへ打ちしが始めなりといふ。同十六年亥春中村座にて葛城にて勤むる。初日舞臺にて金を包む物なき故、衣裳の袖をまことに引切りたりし其思ひ入りよかりし故、翌日より其通りにせしとかや。その後大阪竹本筑後座にて元文四年末四月十一日ひらかな盛衰記といふ新淨瑠璃初日なり。是福引名護屋の菊之丞の無間鐘を取組み、淨瑠璃の文句にも袖引きちぎり三百兩、包むにあまるよるこび泪とある事、瀬川の家の藝、代々の譽なり。

とある。即ち無間の所作は歌舞伎に行はれて、それを淨瑠璃に取入れたものであるが、それは本曲が始めではなくて、既に紀海音の作「傾城無間鐘」(享保八年七月)に仕込まれて居る。併しこれは子を思ふ一念で、親の畫いた無間鐘の畫を撞いて音を出すといふ趣向になつて居る。手水鉢を撞くのは元祖菊之丞の時からであるが、それも享保十三年春に京都市山座で「けいせい満藏鐘」といふ外題の下に演じた場合には手水鉢を手拭掛で打つたのであるが、江戸で初演の時に柄杓を用ひ、この型が長く残り、又その時の舞臺の仕ぐさが



りよ「監 録 滿 い せ い け」



本曲に取入れられていよ／＼名高くなり「梅が枝の手水鉢」とうたはれるに至つたのである。この點から見れば本曲は無間鐘の所作の上に於ては最も注目すべき作品である。これについては作者の當込みもさる事なれど、梅が枝の人形を遣つた吉田文三郎の功を見道してはならぬ。「倒冠雜誌」(寶曆九年七月刊)に「ひらかなの松石衛門、別して梅が枝の無間の鐘は古今無雙の事、尤も菊之丞の形とは言ふものの、舞子或は年忘れの座敷狂言にもして持て囃すは世の人の知る所なり」とある。

本文の中に挿入した大序から三段目の切迄の通しの畫面は文化五年正月江戸の河原崎座で興行された時の繪草紙であるが、全場面を知る上の便宜にも思つて、勿論さう珍しいものではないが入れたわけである。

○

校訂の方針については近松名作集と同じである。即ち語り物たる淨瑠璃正本を忠實に活字で镌刻する方針で、句切りは全部原本通りとし、節付の符標も近松名作集と同じ程度に之を保存して、語り本としての特殊文學の原形を尊重すると共に、一面に於ては假名遣を正し、適當な漢字を宛てて讀解の便を圖る事とした。

校訂用原本たる正本については、享保以前のものは、その依據した原本を一々各篇の解題の終りに示して置いたが、享保以後のものは七行初版本を底本として、十行本のあるものは之と對校したもので、それ等は一々斷らなかつた。

挿畫については成る可く種類様式の異なる上に參考にもなるものをも思つて出來得るだけの努力はした積りであるが、本來原本に無いものを新に入れようとするのである上に、此方面の材料はいくらもありさうに思

はれて、いざとなると實際は容易には思はしいものが得られないので、豫期した結果を得られなかつた事を諒とせられ度い。

▲追記……「金屋金五郎浮名額」解題の項に宇治加賀掾の正本「難波役者評判」未見云々と述べて置いたが、最近その全文を浪速叢書所収の「攝陽奇観」によつて見たが、正本の巻頭には「かなや金五郎正本」とあつて、題簽に「難波役者評判」とある點や結末が増補されて居るかに思はれる點などから考へて、やはり此方が後ではなからうかと思ふ。解題前半刷上後に氣のついた事故、こゝに粗漏を謝すると共に一言書きさへて置きます。(黒木)

昭和二年十一月

校訂者しるす